

資料にみえる 碁の上手たち

(江戸時代以前の碁打たち)

増田忠彦

(注記)

- 碁打の名前のあとに記す年代は、主な囲碁逸話の伝わる時代である。
- 採録した文献は、原則として明治期以前に書かれたものとした。(一部、考証にかかわる論考では明治期以降のものも採録した)また、資料の引用部分が長文になる場合は、本文にかえて概要を記した。
- 関連資料を引用照会する後世の文献も参考資料として一部採録した。その場合、単に前文献の内容を引用するものは書名のみをあげて本文は省略した。特徴のある考証を含む文献については本文も採録した。

[奈良時代の碁打]

☆弁正(701年頃)

『懷風藻』(751年成立 漢詩集)

「[釈弁正。二首] 弁正法師は、俗姓秦氏。性は滑稽、談論に善し。少年にして出家し、頗る玄学にひろし。大宝年中に、唐国に遣学す。時に李隆基の龍潜の日に遇う。囲碁を善くするを以て、しばしば賞遇せらる」

(稿者考)

〈『懷風藻』は我が国最初の漢詩集。その中にみえる入唐僧 弁正の詩(2首)に冠する「序詞」。文中の李隆基は後の玄宗皇帝。弁正は、「龍潜の日」すなわちまだ玄宗が帝位につかない時に会い、囲碁の技量のために賞遇された、とする。弁正が渡唐したのは701年で「大宝律令」の編まれた年にあたる。弁正は現地で2人の混血児をもうけた。その1人は日本に帰り官吏になっており、帰朝してからの事跡は古記録でも確かめられている。『懷風

藻』の詩と逸話も、その子（朝元）が伝えたものかも知れない。この序につづいて五言の律と絶の2首の詩が載せられているが、それは囲碁を歌うものではない。

以下、この逸話を紹介する後世の文献をいくつかあげる。単に『懐風藻』の「序詞」を引用するものは、書名のみをあげて本文は省略する。姓の秦から朝鮮の帰化人として注目するものもある）

（参考資料）

『本朝高僧伝』（1702年成立 高僧伝記）〈巻第七十二 [和州大安寺沙門弁正伝]〉（本文 省略）

『大日本史』（1697年初期稿成立 歴史書）〈巻百十六 [列伝・秦朝元]〉（本文 省略）

『日本詩史』（1771年成立 漢詩史書、江村北海編）

「僧弁正、姓は秦氏。亦た西して唐国に遊び、玄宗眷遇甚だ篤し。しばしば召して談論し、時に囲棋に対すと云ふ。然るときは則ち、或いは盛唐の諸子と諦交し、その潤色を被るものなり。しかして今その詩を閲するに、絶えて住なるもの無し。謂ふべし、空手玉山より還ると」

『皇国名医伝』（1852年成立 名医伝記）

〈前編 卷上〉 [秦忌寸朝元] 「秦忌寸（いみき）朝元。父弁正。大宝中唐に赴き。囲棋を以て唐主の幸を得る。朝慶朝元の二子を生む。弁正と朝慶は彼に死す。朝元独り返る。医方に通ず。養老五年、従六位下に叙し。絹絲布鍬を賜る。図書頭主計頭に累遷す。其の唐語を善くするを以て。命じて訳官を兼ねる」

『囲碁事蹟考』（江戸末期成立 加納諸平編 囲碁史書）（本文 省略）

☆『万葉集』の碁檀越と碁師（8世紀はじめ頃）

(1) 碁檀越

『万葉集』（8世紀成立 歌集）

〈巻4 第500番 相聞歌 題詞〉「碁檀越往伊勢國時留妻作歌一首（碁檀越が伊勢国に往く時、留まる妻がよめる歌一首）」

〈歌・500番〉「神風之伊勢乃浜荻折伏客宿也將為荒浜辺尔（神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に）」

(2) 碁師

『万葉集』〈巻9第1732・1733番 雑歌〉

〈題詞〉〔碁師歌二首〕

〈歌・1732番〉「祖母山霞棚引左夜深而吾舟将泊等万里不知母（おほはやま霞たなびきさ夜更けて我が舟泊てむ泊り知らずも）」

〈歌・1733番〉「思乍雖来来不勝而水尾崎真長及浦乎又顧津（思ひつつ来れど来かねて三尾が崎真長の浦をまたかへり見つ）」

（稿者考）

『万葉集』が今に伝わる形で完成するのは806年だが、前半の16巻までは先の『懷風藻』と同時代にはすでに出来上がっていたとされる。この大部の日本最初の歌集には、囲碁を詠みこんだ歌はみえない。歌はないけれど、上記のように前半の巻の歌題に2カ所、碁の痕跡がある。（この他、万葉歌の中には「吾恋流碁騰（あがこふるごと）」「己知碁知乃枝之（こちごちのえの）」といった真仮名の「碁」の字が散見するが、この真仮名はここでは論じない）

まず、巻4、500番（『新編国歌大観』の歌番号）の題詞に「碁檀越往伊勢国時、留妻作歌一首」（碁檀越が伊勢国に行った時、留守の妻の作った歌一首）とあるのがその一つ。この「碁檀越」の碁は氏だとされている。檀越は寺の施主のことだから「碁檀越」は「施主の碁という人物」となる。「碁」という人物を即「碁打」と考えるのは我田引水にすぎようか。

次に、巻9、1732・1733番の題詞には「碁師歌二首」とあり、つづいて船中の歌がある。この「碁師」は多くの万葉集研究書では意味不明の語だとされている。「碁師」は「碁師」とする伝本があり、それ故の「意味不明」かと思われる。

古来輩出する万葉研究家の定説では、この「碁檀越」と「碁師」を「碁打」と結びつけるものはみえないようである。ただ近世以降の囲碁関係の書では、この万葉の語を囲碁に結んで語るものが多い。（関節蔵は「日本囲碁史綱」で「碁師歌の意味は船中遠行の客吟である、或は本土を離れて外国に渡海したのではなからうか」とし、江戸末期の国学者・加納諸平は『囲碁事蹟考』で「碁の上手とはおぼしけれど未祥」としている）

後述する『三代実録』には「伴宿禰少勝雄、弈碁を善くするを以て、延暦聘唐の日、使員に備う。碁師たるを以てなり。…」と、遣唐使員としての「碁師」の記録がある。「延暦聘唐」とは延暦23年（804）に派遣された遣唐使のことをいい、「万葉」前半の歌の時代よりは遅れるけれども、遣唐使団の中に碁師もいたと読める。研究家が認めていないのだから、万葉の「碁師」をこの遣唐使と結びつけて考えてはいけないのだろう。ただ囲碁のゲームは万葉の時代よりも以前から我国に伝わっていたと考えられる）

(参考資料)

『囲碁事蹟部類鈔』(江戸後期成立 囲碁史書)

「碁師は能書を手師といふが如く碁の高手なるべし、...三代実録の文に拠れる遣唐使の諸司の中に必碁師ある事、古例なりしなるべし。推古天皇の御代より以降延暦の頃までは、いとしばしば漢国に御使ありしかば、碁師等彼国の人と打たるが、中にはいとさかしき手なども有したるべし。帰朝の後其事を朋友などにも語りし事を、ほぼゆがめてもいひ伝へしより、かの江談にみえたる怪説もありしなるべし。杜陽雜編に見たる日本王子のことも碁師などにもやありけむ。猶考ふべし。万葉集の碁師も作主履歴に字にはあらで、弈碁を善くする人の仮名なるべしといへるが如く少勝雄を碁師といへると併見るべし。されど其姓名ともに伝わらざるはくちおし。又同集巻四に碁檀越往伊勢国時留書作歌、といふも見ゆ。此はた作主履歴に檀越可為字、冠之碁、其芸依善而已といへりける。碁といふ氏も他に見あたらねば此説の如くならんか。もし然らば碁師の字檀越にて上に見えたと同人なるべし。...」

☆藤原武智麻呂(737年 没)

『武智麻呂伝』(760年頃成立 伝記、延慶編)

「藤原左大臣、諱は武智麻呂、左京の人なり。...その性温良にして、その心は貞しく固く、礼に非ざれば履まず、義に非ざれば領(おさ)めず、毎(つね)に恬淡を好み、遠く憤鬧(かいどう・乱れ騒がしい)を謝る。或る時は手談して日を移し、或る時は疲覽して夜を徹しぬ。財色を愛せず、喜怒を形さず、忠信を主となし、仁義を行となせり、...」

(稿者考)

〈『武智麻呂伝』の編者・延慶は藤家の家僧。武智麻呂の子の(藤原恵美)押勝が太師(太政大臣)と権勢にあるときに編んだもので、実権者の家伝として文中の褒詞は割り引いて読む必要があろう。余技では詩文や歌ではなく囲碁に熱中したとする。武智麻呂は天平9年(737)に58歳で没した。従って、武智麻呂も前記の弁正と同時代の碁打だった、こととなる〉

☆藤原広嗣(740年 没)

『松浦廟宮先祖次第并本縁起』(鏡神社の縁起)

資料にみえる 碁の上手たち

「...彼（藤原広嗣）存生時に於て五異七能有りと云々。五異と謂は。

一、御髻中。一寸余の角が生ず。[諺曰。人者雖賢專角不生云々。今按謂之世間希有。]

二、宇佐玉殿に候頃年困碁を奉仕す。[此れ亦希有。專人間之事に非ず。]

...（以下、「異」三項と「七能」のこと、後略）

（稿者考）

〈資料は藤原広嗣の霊を祀る松浦宮（佐賀県唐津市の鏡神社）の縁起で、広嗣の人間離れの異能ぶりを記す条。

藤原広嗣は大宰府の少弐に左遷され、玄昉や吉備真備の排除を要求して叛乱、追討軍によって740年に任地で斬殺された人物。

常人と異なるものを五つ、勝れた才能を七つあげ、その「異」の第2に「宇佐八幡の祀神を困碁で慰めた」とある。神様を慰める腕は、まさしく異能の碁打ちといえよう。宇佐八幡の祀神とは応神天皇を指すか。神功皇后のお子 応神天皇は、困碁の伝来伝説にも名をみる天皇である。すなわち、『日本書紀』応神天皇15年に「百済の王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る」とあり、この時代に困碁も百済から伝来したという説がある〉

[平安時代の碁打]

☆伴宿禰少勝雄 と 伴須賀雄（9世紀前半）

(1) 碁師・伴宿禰少勝雄（804年）

『日本三代実録』（901年成立 史書）

「貞観八年九月廿二日、甲子、...夏井兼ねて雑芸を能くし、尤も困碁を善くす。伴宿禰少勝雄は弈碁を善くするを以て、延暦の聘唐の日に使員に備へり。碁師を以てなり。嘗て父善岑は美濃守にして、少勝雄は介たり。夏井、時に年十余歳にして困碁を少勝雄に習ひ、一二年の間に殆ど少勝雄を越す。」

（稿者考）

〈引用文は後の866年（貞観8）の応天門の変の記録で、事件に連座して土佐に配流された紀夏井の略伝の条（部分）。その中で夏井の少年時代の碁の師匠・伴宿禰少勝雄のことに言及し、「伴宿禰少勝雄は弈碁を善くしたので、碁師として延暦聘唐の使員になった」と記す。

「延暦聘唐之日」とは、先にも触れたように延暦23年(804)年の遣唐使派遣をいい、大使は藤原葛野麿で、空海や最澄、道真の祖父菅原清公などが入唐した遣唐使団であった。その使員として「碁師」伴少勝雄がいたとする。

『延喜式』(927年成立)に遣唐使の給禄規定があり、そこには上は大使、副使から末は水手にいたる役名と職種を記載している。芸能の職名には画師・音声生・射手・写字生などを記しているが「碁師」の語はみえない。この『日本三代実録』にいう「備於使員。以碁師也」は、派遣団の正式な使員の外に加えられたものだったのだろうか。なお、伴宿禰少勝雄は生没年を含め事跡は不明だが、史書『日本後記』『続日本後記』の記事を拾うと、812年に従五位下、846年には正五位上にのぼっている)

(参考資料)

「日本囲碁史綱」(関節蔵、『囲碁世界』1号・1909年に掲載の論考)

「...碁師は恰も後世の碁所の如く、一種の職制であるやうにも思はるゝが、予は奈良朝の頃技芸に優秀なる者を称した普通名詞であって、後に至っても、延喜式に遣唐使の官職として(遣唐使の官職を列記する条、略)其名目がない所を見ると、官職ではない矢張り普通名詞に過ぎないのであろうと信ずる。碁技を外交に資用した事は、前にも述べた唐の玄宗皇帝が楊李鷹を新羅に派遣した例もあって、支那や朝鮮では敢て珍しい事ではないのである。日本も大方其等に倣ったものであらう。...」

『囲碁事蹟部類鈔』(江戸後期成立 囲碁史、既出)

(先の「万葉の碁師」の参考資料の引用文 参照)

(2) 2人の天覧碁(その1)(839年)

『続日本後紀』(869年成立 史書)

「承和六年冬十月、己酉朔、天皇は紫宸殿に御し、群臣に酒を賜ふ。散位従五位下伴宿禰雄堅魚、備後権掾正六位上伴宿禰湏賀雄を御床下に召して、囲碁をせしむ。並びに当時の上手也。[雄堅魚は石を二路に下す。]賭物は新銭廿貫文、一局の賭くるところ四貫。約するところ惣じて五局、[湏賀雄、輸四籌、贏一籌、]また遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏に琵琶を弾ぜしむ。群臣つぶさに酔ひ、禄を賜ふに差あり。...」

『西宮記』(970年頃成立 古実書、源高明 編)

[恒例第三、十月、旬事、裏書]「承和六年十月一日、例に依り朝座に着す可し。八省院湿に依りて停止す。仍て右大臣、太政官廳に於て政を聴すと云々。了りて、主上

資料にみえる 碁の上手たち

南方に御す。皇太子参上す。公卿参入し、殿上に侍る。旬の酒恒の如し。時に、前美乃介伴雄堅魚・唐使碁師伴菅雄二人、殿上に召し、錢三百貫を賭け碁を囲む。王卿大夫左右に相分く。魚方勝籌四、雄方勝籌一と云々。…」

(稿者考)

〈承和6年(839年)、碁好きだった仁明天皇が紫宸殿で群臣を饗応した記録。時の碁の上手 伴雄堅魚と帰国したばかりの遣唐使碁師の伴須賀雄(菅雄)とを召して碁をさせた。賭物には新銭が供され、雄堅魚が二子の碁で、5局打ち、結果は須賀雄の4敗1勝。この日は、遣唐使の准判官・藤原貞敏に琵琶を弾かせ、群臣は酒に酔って禄を賜った。

記事より2年前の837年に入唐した藤原常嗣大使の使団が、この年(839年)の9月に帰国している。この日の宮中の宴で琵琶を弾いた藤原貞敏はその遣唐使の准判官で、須賀雄も使員の一人だった。(8月25日に肥前松浦に帰船の記録があり、須賀雄の名も見える)この日の宮中旬の宴は、慰勞を兼ねて帰国した遣唐使を招じ、琵琶と碁という得意の芸を披露させた、というのであろう。

伴宿禰雄堅魚は、「前の美濃介」という官職から、前記804年の延暦の遣唐使団の「碁師」伴宿禰少勝雄と同一人と知れる。対局相手の伴須賀雄は同族の縁者であろう。その延暦の遣唐使団から35年の時をはさんで、新旧の遣唐使碁師が対局した記録である。

碁の上手、伴雄堅魚と伴須賀雄の2人はともに生没年が不明で、この年の年齢もはっきりしない。史書に見える消息でも、雄堅魚は先の「散位従五位下伴宿禰雄堅魚」が最後で後は名を見ない。須賀雄は以後も叙位の記事に名を散見するが、元慶6年(882)の「散位従四位下伴宿禰須賀雄」(官職は878年に因幡権守、『三代実録』)が最後で、卒伝を欠いている。ただ、雄堅魚は35年も前の遣唐使の「碁使」だから、須賀雄とは親子ほど違う年配者であったろう。同姓の雄堅魚と須賀雄が親子だとしたら、2代にわたって「碁師」遣唐使として派遣されたことになる

なお、『西宮記』の方には、遣唐使「碁師」とある。「碁師」の字は『万葉集』にもみえたが、この場合は明らかに「碁師」の義で使っているといえる)

(3) 2人の天覧碁(その2)(844年)

『西宮記』

[恒例第三、十月、旬事、裏書]〈還宮後儀〉「承和十一年(844年)十月一日、主上南殿に御す。皇太子入見す。諸衛番奏すること常の如し。王卿は殿上に侍す、散位従

五位下伴宿禰雄堅魚・備後掾伴須賀雄を召し、御座前に於て、囲碁をせしむ。[雄堅魚及須賀雄碁子二取。]賭物は、承和錢二十貫文。一局に賭る処也と云々。…」

(稿者考)

〈『西宮記』の裏書にある記録で、前の839年につづく伴宿禰雄堅魚と伴須賀雄の御前試合。こちらの方は史書(『続日本後紀』)では「冬十月庚辰朔、天皇紫宸殿に御し、侍従已上に宴、祿を賜るに差あり、云々」とあるが、囲碁を催した記事は欠いている。2人の手合割は雄堅魚の二石で、前の記事と変わらない。こちらも賭金は20貫文で「一局に賭ける所也」と、前回の5局に対して一番勝負とするが、結果は記していない。

ここで少し寄り道して、史書にはじめてみえる「二子の置碁」のことについて小考してみる。中国では近代まで「事前置石制」(互先の対局で、四隅の星に黑白各二子をタスキに配して開局する)だったとする。どの時代から「事前置石制」だったのかははっきりしないが、唐の時代はそうだったとする説が一般的のようである。この「事前置石制」の場合に置碁はどのように石を置くのか、明の時代の古棋譜をみると、二子局では現在と同様に黒石を対角線に二子置いて白から開局している譜がある。三子局はさらに天元に黒石を置き開局している。

以下は稿者の推論である。この二子局は「事前置石制」とのかかわりでいうと、「白の事前置石を二子ともに取り去った」状態ということにもなる。すなわち、置碁はハンドの石を「置くのではなく、上手の事前置石を取り除く」という感覚となる。

上記、天覧の二子の置碁で、前の『続日本後紀』には「石を二路に下す」とあり、右の『西宮記』では「碁子二取」と表現している。この、殊に「碁子二取」の表現には、「事前置石」の「白石二子を取り去る」ことに通うところがありはしないか。日本でも古くは中国と同様に「事前置石制」だったと考えられているようである。『西宮記』の表現はそのことを示唆するものではなからうか)

(参考資料)

『薺庵隨筆』(1772年頃成立 考証隨筆、本居宣長編)

「○西宮記、承和六年十月旬に、美濃介伴雄堅魚と云人と、遣唐使碁師伴菅雄と云人とを、殿上に召て、錢三百貫を賭にして、碁をうたせさせ玉ひし事見えたり、遣唐使に碁上手を添て、遣はされしと見ゆ、…」

『俳諧 ケイ』

「雄堅男が炬燵布団も碁盤編 『ケイ24』」

(この老いた上手の雄堅男は、江戸後記の雑俳の中にも一句詠まれている。老人に

炬燵を配する趣向。江戸の雑俳〈川柳〉愛好家にも、この古代の碁打は知られていたようである〉

☆紀夏井（866年）

『日本三代実録』

（応天門事件の関係者を処断する条）「貞観八年九月廿二日甲子、…是の日、大納言伴宿禰善男、男の右衛門佐伴宿禰中庸、同謀者紀豊城、伴秋実、伴清縄など五人、応天門を焼くに座し、斬るに当る。詔して死一等を降し、並て之を遠流に処す。善男は伊豆国に、中庸は隠岐国、豊城は安房国、秋実は壱岐島、清縄は佐渡国に配す。相坐して配流する者八人、従五位上行肥後守紀朝臣夏井は土佐国に配す。…夏井は眉目疎朗。身長六尺三寸、性甚だ温仁、稚くして才思あり。…夏井兼ねて雑芸を能くし、尤も囲碁を善くす。伴宿禰少勝雄は奕碁を善くするを以て、延暦の聘唐の日に使員に備へり。碁師を以てなり。嘗て父善岑は美濃守にして、少勝雄は介たり。夏井、時に年十余歳にして囲碁を少勝雄に習ひ、一二年の間に殆ど少勝雄に超たり。…」

（稿者考）

〈前項でも引用した『日本三代実録』の応天門事件の条、「遣唐使 碁師」伴少勝雄の弟子であった紀夏井の記事として再掲する。

応天門の変は、866年（貞観8年）の閏3月10日に起こった不審火に起因する事変で、その火災のさまは『伴大納言絵巻』の絵で知られる。引用文は変事の関係者の処断と略伝を記す条。事件は、火災から半年を経た9月22日に、密告を受けて伴大納言以下の関係者が処断された。その罪人の略伝を記す条にみえる、紀夏井の少年時代の囲碁の逸話である。

父親の紀善岑が美濃守の時、夏井は10歳余の少年だった。囲碁の上手伴少勝雄が父の下官の美濃介で、夏井は彼について囲碁を習った。少勝雄は遣唐使の碁使にも選ばれた打ち手だったが、一兩年のうちに夏井は師匠を超えた、という。

夏井は事件に関与したわけではない。首謀者とされた伴大納言の舎人だった紀豊城が共謀者の1人とされ、夏井はその異母兄ということで縁罪をとわれて土佐に流された。

蛇足だが、古代の事変には政争謀略の匂いにつきまとう。仁明天皇を継いだ文徳帝は在位4年で急死して、9歳の幼帝清和天皇となる。この幼帝は皇太子のときに政略結婚をさせられて、外戚の祖父・藤原良房が実権を握って政事を行う。応天門事件があったのが閏3月、8月に良房は太政大臣から摂政に就き、その直後の9月に密告によって関係者が処断されて

いる。承和の変からつづいた良房の勢力拡大は、この応天門の変で完成し、良房は臣民としては初めて摂政に就いた。嵯峨・仁明のいわゆる親政時代が終って摂関政治の幕明けともなった事件であった〉

(参考資料)

『大日本史』(1697年初稿 成立 史書)

[列伝・紀夏井](前書内容の引用で本文 省略)

『本朝語園』(1706年成立 説話集)

〈巻二〉[夏井多芸〈三代実録〉](前書内容の引用で本文 省略)

『爛柯堂棋話』

〈巻一〉[困碁伝来、お尋ねの事]「五十四代仁明天皇の承和五年、遣唐使あり。大使は藤原常嗣、副使は小野篁なり。伴勝雄という者、善碁を以て唐使の員に充てらる。これ唐の文宗の開成元(三)年に当る。紀夏井、勝雄に困碁を学ぶ。年十余歳、一、二年の間に勝雄に超えたりという。

巻二[源氏物語、困碁の事]『源氏物語』絵合に、「筆をとる道と碁打つことぞ、あやしうたましみのほど見ゆる…」といえり。按ずるに、紫式部深く感ずる事ありて誉めし言なり。あに筆と碁を善くする者の誉れに非ずや。ここに、これを兼ねたる人あり。紀夏井これなり。…」

(稿者考)

〈『爛柯堂棋話』の考証は、804年の遣唐使と837年のそれとを混同している。夏井の碁の師匠・伴少勝雄は前の時の碁使、後の遣唐使の碁使は伴須賀雄であった。

なお、応天門の変とその火災の惨状は「四大絵巻物」の1つとされる『伴大納言絵詞』にも描かれて知られる。この『伴大納言絵詞』は常盤光長の絵と伝えられるが、最近の研究では、困碁愛好家には有名な絵巻物『吉備真備入唐絵詞』も、常盤光長の絵とする説が有力なようである〉

☆和氣貞臣(853年 没)

『日本文徳天皇実録』(平安期成立 史書)

「仁寿三年四月十四日、甲戌。大内記従五位下和氣朝臣貞臣卒す。貞臣、字是和仁。播磨守従四位上仲世の第三子なり。…貞臣は人となり聡敏、質朴にして華少し。性は甚だ雷を畏る。小芸に留意せず、ただ困碁を好む。敵と対し交手するに、日暮れて夜

の深むを覚えず。…」

(稿者考)

〈853年(仁寿3年)に没した和気貞臣の卒伝記録。和気清麻呂の孫で、疱瘡に罹り37歳の若死にであった。省略した文中には、若く老荘を学び秀才・対策の試験にも合格、「時の人これを惜しむ」とあり、囑望された人物だったようである。

祖父の和気清麻呂は、弓削道鏡が宇佐八幡の神託を抛り所に帝位を狙った際(769年)、宇佐に派遣されて神託の虚偽を奏上して道鏡を排斥し、その後も平安の新都造営大夫の重職も果した官人として古代史に名を残す。

『大日本史』の「列伝」にも、この阿部貞臣の父親・阿部仲世の項をたて、その中で子の貞臣の事蹟として、右『日本文徳天皇実録』の文を引いている。

なお、江戸末期の稿本『爛柯堂棋話』に、次のような記事がある。

[碁の事、古く見えたる事]『日本史』に、和気仲世、年一九にして文章生に挙げらる。性至孝、奉公忠勤、人となり聡敏質朴、意を雑芸に留めず、ただ囲碁を好む。のち大いに学び、研鑽輟まず。清麿の子なり、と」

この和気仲世(784~852年)は和気貞臣の父親で、1年前の852年に69歳で没している。この父親仲世の方も、『日本文徳天皇実録』に卒伝を記すが、囲碁にかかわることはみえない。

『爛柯堂棋話』の記述は、『大日本史』にある「仲世列伝」によつたらしく、父子2人の事績を混同して、父と子とを取り違えている)

(参考資料)

『大日本史』(既出)

「列伝・和気仲世」(『日本文徳天皇実録』の引用を出す、本文 省略)

☆日本の王子(850年)

『杜陽雜編』(唐9世紀末成立 説話集、「東洋文庫」『玄々碁経集』所収訳文による)

「唐の宣帝の時の大中年間(847~859)に、日本国の王子が来朝し、宝器や音楽を献上した。天子は、さまざまな技芸を行わせ、珍しい御馳走を用意して厚くもてなされたが、王子が囲碁を善くしたので、待詔の顧師言に相手するように命じられた。王子は如楸玉の盤、冷暖玉の石をとり出していうには、「わが国の東三万里に集真島があり、島の上に凝霞台があり、台上に手談池があり、その池の中に玉の碁石が産する。手を加えなくても自然に黑白に分かれ、冬は温かく夏は冷たいので、冷暖玉と呼ぶ。

また、如楸玉を産する。楸（ひさぎ）の木に似ていて、これを彫って碁盤にするが、清らかに輝き、鏡とすることができるほどである」と。

さて師言が対局したが、三十三手目に至っても優劣が決しない。師言は、君命を辱めることを恐れ、手に汗して思いを凝らし、やっと着手した。これを鎮神頭といい、すなわち両シチョウを解決する形なのである。

王子は、目をみはり身をすくめ、ついに伏して敗れた。鴻臚にむかって、「待詔は第何番目の打ち手でられるのか」と聞いた。鴻臚（接待の官）はひざまずいて「第三でございます」と答えた。実は、第一の名人なのであって、王子が「第一の方にまみえたいが」というので、「第三の者にお勝ちになって第二にまみえ、第二の者にお勝ちになって第一にまみえることができます。いきなり第一にまみえたいとおっしゃっても無理です」と答えた。王子は盤をおおって、「小国の第一は、ついに大国の第三に及ばないのか」となげいた。現在でも好事者は、この顧師言の鎮神頭図を大事にしている。…」

『旧唐書』（五代後晋の劉昫〈946年没〉編 史書）

「〈十八下 宣宗本紀〉日本国王子、入朝貢方物、王子善棋、帝令待詔顧師言、與之對手、」

『冊府元龜』（北宋11世紀初頭 勅命により編纂）（『杜陽雜編』と同内容で省略）

（稿者考）

〈唐の宣宗の時（850年頃）日本国の王子が唐に渡りかの地の名人と対局した、という記録で、資料はいずれも中国のもの。3書ともに、日本の王子の入唐と献上の碁器、さらに待詔顧師言と対局したことを記している。

興味深い囲碁の史話だが、史実として裏付けるような日本側の記録は見当たらない。唐に渡った日本の王子では真如法親王（799年生まれで平城天皇の第三皇子・高岳親王、嵯峨天皇即位時に立太子、翌年政争で廃太子、822年出家して真如と名乗り空海の弟子となる。晩年862年に入唐、海路天竺に向う途中865年ころマレー半島で歿したとされる）がおり、この親王を当てる説もある。

この囲碁逸話は、江戸期の考証書などで考証されているが、日本の王子を真如法親王とする説は否定的である。近代の史家では昭和18年3月『ひのもと』の論考で、宮崎市定がこの真如法親王を仮託する見解を述べているものの、否定的な意見が多い。（昭和40年・杉本直治郎『真如親王伝の研究』、昭和53年・池田温『古代史論集』など）

「日本の王子」は不明というのが、これまでの結論のようである。なお、遣唐使は現地で

資料にみえる 碁の上手たち

は唐名の替え名を使うのが通例で、遣唐使の研究書などによると、当時の唐側の聞き取り書などでは、入唐した日本人の官位や所属などは杜撰なものだったとされている。

日本の書では右のほかにもこの史話を取上げるものは多い。そこでは、先の『異称日本伝』にもあった、王子が献上した「冷暖玉」の産地はどこかの詮索が賑やかであるが、王子の人物考証と結びつく論考はない。以下、この逸話に論及する後世の文献をあげて置く

(参考資料)

『異称日本伝』(1688年成立 歴史研究書)(本文 省略)

『囲碁事蹟部類鈔』(既出)(本文 省略)

『和漢三才図会』(1712年頃成立 事典)(本文 省略)

『広益俗説弁』(1715年成立 考証書)(本文 省略)

『古代大和朝廷』(1988年成立 歴史研究書)(本文 省略)

『真如親王伝の研究』(1965年成立歴史研究書)(本文 省略)

『古代史論集』(1978年成立歴史研究書)(本文 省略)

(冷暖玉に言及する文献...いずれも本文省略)

『日本一鑑』(1556年成立) 『西遊記』(1795年成立) 『熊野巡覧記』(1794年成立)

『年中故事』(1800年成立) 『静寄余事』(1800年頃成立) 『豊後国志』(1804年成立) 『技癢録』(1802年成立)(以下略)

☆寛蓮(904年頃)

(1) (醍醐天皇御前での対局 904年)

『西宮記』

「[臨時四、宴遊、囲碁]延喜四年九月廿四日、寛蓮を召し、右少弁清貴と碁を囲ましむ、[唐綾四疋、法師勝つ、別に禄あり。]...」

『古今著聞集』(1254年成立 説話集)

「〈卷十二〉[博奕第十八]延喜四年九月廿四日、右少弁(藤原)清貴、寛蓮法師をめて、囲碁をうたせられけり。唐綾四段、懸物にはいたされけり。寛蓮勝て給りけり。聖代にも、かやうの勝負いましめなかりけるにこそ。...」

(稿者考)

〈延喜4年(904年)醍醐天皇が藤原清貴と法師・寛蓮を召し、賭物を供して碁を打たせて上覧した、というもの。資料の故実書『西宮記』の著者・源高明は醍醐天皇の皇子の一人

で、碁聖・寛蓮の名が見える最も古い記録と思われる。一方の『古今著聞集』の成立は鎌倉初期で、『西宮記』によった逸話と知れる。

寛蓮の相手の藤原清貫は、宇多法皇の信任厚かった参議保則の4男で母は在原業平の女。晩年には『延喜式』を編纂した智才の人物で、この時は38歳で五位の蔵人であった。この清貫には『政事要略』に、藤原仲平（藤原時平の弟）と宮中催事「駒牽」での囲碁対局の記事もある。

この平安初期の囲碁の上手・寛蓮は、『源氏物語』をはじめとして以後の文芸に語りつがれている〉

(2) (寛蓮の素生と宇多天皇に近侍したこと 908年)

『東宝記』(東寺の結構事跡の記録)

「〈一、宇多法皇於東寺御授与事〉延喜八年戊辰(九〇八年)五月三日、癸酉、[鬼宿、土曜、滅門、]禅定法王、[御年四十三、]於東寺灌頂院令授伝法職位法三親王真寂、[法皇御子年廿三、藤四、]寛蓮、[年卅五、臘九、]会理、(四人の名、略)已上同日伝授、此日寛空入灌頂壇、奉打金剛輪菩薩云々、[已上寛信法務記、略抄之、]...

(稿者考)

〈『東宝記』は東寺(護国寺)の記録、条は宇多法皇が伝法灌頂を授けられた時のもので、『本朝伝法灌頂師資相承血脈』にもある。寛蓮の名もみえ、908年時点で「年卅五」とある。院に随って出家したのは899年で、以後も亭止院(宇多法皇)の殿上法師として近侍したとする〉

『大和物語』(951年頃成立 物語集)

〈巻二〉[旅寝の夢]「帝(宇多帝)、おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひけり。備前の掾にて、橘の良利といひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまひける御ともに、これなむおくれたてまつらでさぶらひける。「かかる御歩きしたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これかれ、さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつつ歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日根といふ所におはします夜あり。いと悲しかりけり。さて、「日根といふことを歌によめ」とおほせごとあり

ければ、この良利大徳、

ふるさとのたびねの夢に見えつるは

恨みやすらむまたとはねば

とありけるに、みな人泣きて、えよまずなりけり。その名をなむ寛蓮大徳といひて、のちまでさぶらひける。…」

『大鏡』(1025～1065年成立 歴史物語集)

〈上巻十〉[五十九代、宇多天皇]「寛平九年七月五日、おりさせたまふ。昌泰二年己未十月十四日、出家せさせたまふ。御名、金剛覚と申しき。承平元年七月十九日、うせさせたまひぬ、御年六十五。

肥前掾橘良利、殿上にさぶらひける、入道して、修業の御供にも、これのみぞつかうまつりける。されば、熊野にて、日根(ひね)といふ所にて、「たびねの夢に見えつるは」ともよむぞかし。人々の涙落すも、ことわりにあはれなることよな。…」

『十訓抄』(1252年成立 説話集)

〈第六の九〉[橘良利の出家・行成卿の歌](本文 省略)

(編者考)

〈『大和物語』は951年ごろに成ったとされ、寛蓮の没後間もなくの記事で、宇多院の出家とその後の日常にも近侍していた様子が語られている。近世に編まれた『大日本史』も右の『大和物語』の条を引いて寛蓮の名をあげている。また、『大和物語』の近世の古注解書『大和物語虚静抄』『大和物語錦繡抄』には、寛蓮が「碁式」を作って天皇に献じたとする考証を載せる。この寛蓮と「碁式」とを結びつける考証は、次にあげる源氏古注『源氏釈』が、稿者の目にした資料では最古のものである〉

(3) (碁聖と称されること)

『源氏物語』(1007年頃成立 物語集)

「[手習の巻]…尼上(僧都の妹の尼君)とう帰らせたまはなん。この御碁見せたてまつらむ。かの御碁ぞいと強かりし。僧都の君、はやうよりいみじう好ませたまひて、けしうはあらずと思したりしを、いと碁聖大徳になりて、さし出でてこそ打たざらめ、御碁には負けじかし、と聞こえたまひしに、つひに僧都なん、二つ負けたまひし。碁聖が碁にはまさらせたまふべきなめり。あないみじ。…」

(稿者考)

〈浮舟が囲碁を打つ場面。「手習」は「宇治十帖」の巻末に近く、源氏はすでに亡く薫の時代。薫と匂宮との愛のはざまに苦しんで、浮舟は宇治川に身を投げた。死にきれずに川岸に気絶した浮舟は、通りかかった横川の僧都に助けられ僧院で養われる。僧都や妹の尼君が留守のある日、尼僧にうながされて浮舟が碁を打つ。浮舟の意外の強さに手を焼いた尼僧は「碁聖大徳ほどではないが、腕自慢の僧都を打ち負かした妹の尼君に、浮舟のこの碁を見せたいものだ」と述懐する。

『源氏物語』には「碁聖大徳」とあり、寛蓮の名はない。数多くある後世の「源語注解書」のことごとくが、この碁聖大徳は寛蓮その人だと注解している。『源氏物語』は時代を延喜の世に仮託したともいわれ、それで「碁聖」＝「寛蓮」となるのだろうか。

いま一つ注目されるのは、「源語注解書」の中に「寛蓮が勅を受けて碁書『碁式』を編んで天皇(醍醐天皇)に撰進した」という考証を記すものがある。この「寛蓮が碁式を編んだ」という記録は、伝存するほかの古記録には見えないようだが、今の囲碁書などにも定説のように書かれている)

(参考資料)

『源氏釈』(1170年頃成立 「源語」注解書)

(本文)「基勢大徳延喜十三奉作碁式、俗名橘良利、…」

『紫明抄』(1290年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『河海抄』(1365年頃成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『仙源抄』(1381年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『類字源語抄』(1431年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『花鳥余情』(1472年成立 「源語」注解書)

(本文)「備前の掾橘良利は、肥前の国藤津郡大村の人也。出家して寛蓮と名づく。亭子院の殿上法師となる。亭子法皇山ふみし給ふ時御ともしけるよし、大和物語にのせ侍り。碁の上手なるによりて碁聖といへり。延喜十三年五月三日、碁聖勅を奉じて碁式を作り之を献ずと云々。抱朴子曰、碁を囲む者世に之を碁聖と謂、故に叡子卿・馬綏明に碁聖の名有る也。或書曰、唐堯碁を造り其の子丹朱に教。一説曰、然らず碁戦国之時に於て出ずと、云々。…」

『一葉抄』(1495年成立 「源語」注解書)

(本文)「河(『河海抄』)基勢大徳也。備前掾橘良利は肥前の国藤津郡の大村人也。

資料にみえる 碁の上手たち

出家して寛蓮名づく。亭子法皇、山ふみし給ふ時御供しけるよし、大和物語にのせ侍り。碁の上手なるによりて碁聖と云り。延喜十三年五月三日、碁聖奉勅作碁式献之云々。…」

『浮木』(1537年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『明星抄』(1550年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

『紹巴抄』(1565年成立 「源語」注解書)

(本文)「碁聖。肥前橘良利、肥前国藤津郡大村の人也、出家して名寛蓮為亭止院殿上法師。亭子法皇山ふみし給ふ時御ともしけるよし大和物語にのせ侍り。碁の上手なるによりて碁聖といへり。延喜十三年五月五日碁聖勅を奉じ碁式を作り之を献ずと云々。枹朴子曰、碁を囲む者世に之を碁聖と謂、故に巖子卿・馬綏明に碁聖之名有る也。或書曰、唐堯碁を造り其子丹朱に教。一説曰、然らず碁は戦国之時に於て出ると、云々。…」

『万水一露』(1575年成立 「源語」注解書)(本文 省略)

(稿者考)

〈『源氏釈』に「基勢大徳延喜十三奉作碁式」とある。『源氏釈』は源氏古注書の嚆矢ともされるもので、成立は12世紀と古い。前述したが稿者管見のかぎり、「寛蓮が碁式を編み撰進した」という記録は、この『源氏釈』が最古のものである。その『源氏釈』は「延喜十三」と撰進した年号を記すだけだが、『花鳥余情』など後の注釈書は「五月三日」(『紹巴抄』は「五月五日」と日付まで詳記する。古注書の編まれたころ、少なくとも『花鳥余情』の時代には、『碁式』の記録が伝わっていたのであろうか。この日本初の棋書『碁式』も、今は伝わらない。

なお、この延喜から270年後の1199年の奥書を持つ『囲碁式』という棋書が「続群書類従」に載っている。これは寛蓮の『碁式』を敷衍させたものという説もある〉

(参考資料)

『二中歴』(鎌倉初期成立 事典)

「[第四 〈僧職〉]

○円堂三僧 [延喜元年]

観賢・寛蓮・寛超・神日・仁元・平遍・寛空・寛忠・寛朝・寛静

第十三「芸能、一能、博奕、名人、名物、十列」

○囲碁、碁聖、寛蓮・賀陽・祐拳・高行・実定・教覚・道範・十五小 [少] 院・長

範・天王寺冠者、

説云、碁聖は囲碁上手之稱也。賀陽は外記賀陽宣政〔正、手〕也。祐拳は石見守平祐拳也。高行は右衛門入道也。実定は豊後守中原実定也。教覚は三井院人也。道範は嵯峨關梨十五少院者。…」

(稿者考)

〈『二中歴』は鎌倉時代に編まれた百科辞典で、平安期の同種記録に基づく考証。碁聖(囲碁の上手)として寛蓮を筆頭に10人をあげている〉

(4) (寛蓮の対局逸話)

『今昔物語集』(1120年頃成立 物語集)

〈巻二十四の六〕[碁擲の寛蓮、碁擲の女事〕(本文 省略、概要)〈寛蓮が宇多法王と醍醐天皇に囲碁の師として近侍したこと。醍醐天皇と賭け碁を打ち黄金の枕を勝ち取り、それを資金に一寺を建立すること。また、謎の妖女と碁を打ち、生き石のないほどに打ち負かされる〉

『古事談』(1212～1215年成立 説話集)

〈巻六の七十三 亭宅諸道四六一〕[碁勢、碁の懸物にて一の堂を建立する事〕(本文 省略、概要)〈醍醐天皇から賭け碁で黄金の枕を勝ち取り、それを資金に一寺を建立する〉

『古今著聞集』(1254年成立 説話集、橘成季編)

〈巻十二 博奕第十八) (本文 省略、概要)〈寛蓮が醍醐天皇と碁を打ち、銀の笙を賜る〉

(参考資料)

『山域名勝志』(1705年成立 名所記)(『古事談』『今昔物語』『河海抄』の引用、本文 省略)

『本朝語園』(既出)(『今昔物語集』の引用、本文 省略)

『広益俗説弁』(既出)

〈附編卷三十三〕[碁聖大徳が説]「俗説云、寛蓮法師は、俗名肥前掾橘良利といふ。肥前国藤津郡大村の人なり。亭子院〔宇多天皇〕御出家のとき、出家して寛蓮と名づく。殿上法師なり。囲碁をよくす。この故に碁聖と称され、『碁式』をつくる。是、日本の碁のはじめなり〔『万首唐絶句』に奕僧とあるは、寛蓮が類なり〕

資料にみえる 碁の上手たち

今按ずるに、碁に妙を得たる故に碁聖と称する説、非なり。『蓬窓日録』(明の書)云、「林中朗以囲碁為座隱。或亦謂之手談。又謂之碁聖」とあるを見るべし。『続日本後記』云、「承和六年十月朔、天皇御紫宸殿、召散位從五位以下伴宿禰雄堅魚・備後権掾正六位須賀雄於御床下、令囲碁。並當時之上手也 [雄堅魚下石二路] 賭物新錢廿貫文。局所賭四貫、所約総五局 [須賀雄輸四籌。贏一籌]」。○『文徳実録』云、「大内記從五位下和氣朝臣貞臣唯好囲碁。日暮夜深」。『三代実録』云、「從五位上肥後守紀朝臣夏井善囲碁。十余歳習囲碁於伴宿禰於勝雄。一二年間殊越于於勝雄」とあるを知るべし。…」

『桑華蒙求』(江戸中期成立 説話集)

[五九、寛蓮金枕、道古博局](『今昔物語集』の引用、本文 省略)

『枯杭集』(1668年成立 説話集)

「さて、この碁、このくにへ、わたりしは、吉備大臣、遣唐使にわたりて、七宝をつたへて、帰朝したまひしより、あまなく、世にひろまれり、又、中比、備前丞橘良利と、きこえし人、肥前のくに、藤津の住人なり、寛蓮亭子院上法師といふ、碁名人なり、寛平法皇のときの人なり、これを、世間に、碁聖とは、いひならはせるなり、…」

『筆のすさび』(1806年成立 考証随筆)(『今昔物語集』の引用、本文 省略)

『篠舎漫筆』(1749年成立、考証随筆)

[囲碁上手寛蓮]「今昔物語廿五に、延喜の御時に、寛蓮といふ碁上手の僧あり。宇多院の殿上法師にて有ければ、内にも常にめして御碁を遊ばしけり云々とあり。是は志貴山の第一の宝蔵物にて、飛鉢といふものあり。その銘に寛蓮とあり。いかなる人かとおもひしを、此人なり。かの銘の年号延喜七年とあり。同じ時代なり。大和物語、著聞集にも出たり。…」

『松亭漫筆』(1850年成立、考証随筆)(『今昔物語集』の引用、本文 省略)

(和歌)

『類題鮫玉集』(江戸後期成立 歌集)

こがねもてつくる枕は打いでし

石の光となりにけるかな 岩崎美隆

(俳諧)

『松嶋眺望集』(一六八二年成立 俳書)

くるざきや碁聖法師が袖の月 三千風

(雑俳)

君が代や女の鬼は碁に有りて 『川柳評宝暦12』
碁の返報に井戸へなげた 『禁の塵』
碁盤直して寛蓮を召す 『ケイ17』
寛蓮は人体捨た大山碁 『ケイ25』
井目の井へ打込んで逃おふせ 『柳の糸口』
寛蓮も困碁は一目置いて逃げ 『新柳樽18』
車で寛蓮中おしの困碁に逃げ 『新柳多留25』
狐狸と見て困碁に寛蓮逃げを打 『新柳樽33』
寛蓮は鬼かと御簾の羅生門 『新柳樽35』
目潰しをする寛蓮が碁の相手 『新柳樽36』
寛蓮妙手匆かけた井戸の水 『しげり柳上』
黄金の枕寝かさず一寺立て 『しげり柳上』
井にあるは金の枕か冷し瓜 『しげり柳上』
井へ枕天窓割して出来た智恵 『亀戸天満宮奉納』
枕得て寛蓮寐覚め能き心地 『三箱追福』
御簾越の答へ寛蓮舌を巻き 『風嘯追福』
碁のかけの枕を井戸へ打ツたがへ 『風嘯追福』
きうくつや・仙洞様の御碁相手 『江戸すずめ』
寛蓮もこりて其いご沙汰はせず 『柳風狂句合』

☆天王寺冠者と長如来(1125年頃)

『散木奇歌集』(1125年頃成立 源俊頼の私歌集)

「〈長如来といふごうちのごをうつをみて〉 隆源阿闍梨

長如来ごをりやくともしけるかな

(つく)天王寺なる凡夫にはまく...

(稿者考)

『散木奇歌集』は源俊頼(1055~1129)の自選家集。上の歌は、連歌付合のなかにあるもの。詠み手の隆源阿闍梨は生没年は不詳だが藤原通宗の次男で『隆源口伝』の著がある歌学者。碁打の長如来は不詳。付句にいう「天王寺なる凡夫」について、江戸幕末の『困碁事

資料にみえる 碁の上手たち

『蹟部類鈔』に次の言及がある)

(参考資料)

『囲碁事蹟部類鈔』(既出)

「〈高手・天王寺冠者広定〉(歌のこと、略)散木集の作者俊頼朝臣は堀河鳥羽崇徳の三朝に仕し人なれば、天王寺の凡夫といへるも、其頃の人なるべし。口伝は夫よりやや後正治年中の撰なれば、其人の説を載せるなるべし。冠者を凡夫といへるは、如来に対へて戯れたるなり。…」

[鎌倉時代の碁打]

☆舞人好方と越前公実暹(1191年)

『玉葉』(摂政 藤原(九条)兼実の日記)

「(建久2年・1191年)七月廿七日、癸酉、大将(藤原良経)来る[布袋也]今日、囲碁上手二人を召し、其の興を催す。[舞人好方、越前公実暹等なり、好方定先を得、猶算二を負け了んぬ。賭物扇十二本]…」

(稿者考)

〈日記の記者、九条(藤原)兼実は九条家の祖とされる鎌倉初期の公家、頼朝の知遇を得て摂政・関白に昇った(日記の当時は摂政)。大将・藤原良経は実子。囲碁の上手、舞人好方と越前公実暹を招いて賭物に扇を供して対局させた。2人の内、越前公実暹は、越前の斎藤氏の人物と思われるが詳細不詳。舞人好方は『棋道』「中世の囲碁事情」で渡部義通は、「舞人と書かれている好方は『吾妻鏡』にでてくる「宮舞曲・神楽曲」の名人、右近将監多好方(おおのよいかた)にちがいはない。…」とし、鎌倉の頼朝に招かれて神楽を習授した曲人、と考証している〉

☆百科事典に載る上手たち10人(1198年頃)

『二中歴』(既出)

「〈第四〉[僧職]

○円堂三僧[延喜元年]

観賢・寛蓮・寛超・神日・仁元・平遍・寛空・寛忠・寛朝・寛静

〈第十三〉〔芸能・一能・博奕・名人・名物・十列〕

○囲碁、碁聖、寛蓮・賀陽・祐拳・高行・実定・教覚・道範・十五小〔少〕院・長範・天王寺冠者（欠文）説云、碁聖は囲碁上手之稱也、賀陽は外記賀陽宣政〔正、手〕也、祐拳は石見守平祐拳也、高行は右衛門入道也、実定は豊後守中原実定也、教覚は三井院人也、道範は嵯峨闇梨、十五少院者、…」

（稿者考）

〈『二中歴』は13世紀末に編まれた人文関係の百科事典。前出の寛蓮以下、平安から鎌倉期にかけての囲碁の上手の名前10を列举している。

『囲碁世界』第4号、関星月（節蔵）の「日本囲碁史綱」および「囲碁の歴史」に、右の碁打たちの消息を記しており、参考に転載する。

「是は平安朝の半ばから鎌倉の末にかけての碁家と見えるが、果して何時代の人で何んな事蹟を有って居るのか、…僅に賀陽宣政は一条天皇の長保2年（1000年）正月権少外記に任ぜられ…同年11月直講を兼ね、翌3年7月歿した人である事、及び平祐拳は光孝天皇の流忠望王の後裔越前守保衡の子で、従四位下駿河守に叙任した人である事が、前者は外記補任に拠って、後者は尊卑分脉脱漏系図に拠って知られたのみに過ぎぬ。…只道範阿闇梨は後鳥羽天皇の御帰依浅からざる人で、又天王寺冠者は囲碁口伝に其説が収められてある広足である事は、同記の分註で分って居る。…」

右文中の寛蓮、天王寺冠者は既出。『囲碁口伝』は次記、道範は後記）

☆『囲碁口伝』の上手 玄尊・広定・天王寺冠者・公安（1199年頃）

『囲碁口伝』（1199年頃 玄尊編）

「〔手受相打法〕…凡囲碁肝心此式にすぐべからず。少々所抄出也。先達の口伝並私の意樂。為未練注之。広定説云。〔天王寺冠者。〕如法の上手の碁は面白き手なし。心得ざること出来るこそ興ある手にもあれ。あやまり有まじき様に兼て打をきたるは。目をおどろかす事なしと云。又曰。上手は幼少より打つ。成人の後に打出るは逸なる物にはなるべからず。…」

公安説云。〔秦五〕碁は所詮只能々案ずるにはしかず。いそぎて打ば必のちに悔あり。…」

（稿者考）

〈1199年の奥書がある『囲碁式』は、平安の上手・寛蓮が勅撰した棋書を元に玄尊が編ん

資料にみえる 碁の上手たち

だもの、とする説もある。その玄尊の作として伝わる『囲碁口伝』の中に、広定・天王寺冠者・公安といった碁打ちの名がみえる。『囲碁式』は現存する最古の棋書とされ、その編者・玄尊もこの当時の上手であるわけだが、この人物についての記録をみない)

☆子どもの上手（1200年）

『玉葉』（関白 藤原（九条）兼実の日記）

「（正治2年・1200年）二月四日、庚申。天晴る。この日春日祭なり。袂を修め遥拝す。南の極み山峰に迫り一星あり。蓋しこれ老人星か。瑞と謂ふべきか。中将（記者兼実の男・良輔）の小舎人童、生年十二歳、囲碁の上手の由を聞きこれを召見す。実に以つて不思議なり。…」

『明月記』（藤原定家の日記）

「（正治2年・1200年）二月四日、天晴る。風雪、甚だ寒し。午の時ばかり、召しに依り八条殿（暲子御所）に参る。中将殿（良輔）九条殿（兼実）に参り給ふ。御共すべき仰せなり。未の時ばかり御共し参入す。中将殿の小童、囲碁の上手なり。件の碁、御覧ずるの料なり。御前に召し了んぬ。其の後大臣（良輔）殿に参る。未だ見参せざる間に、腹痛忽発り、苦痛術なし。仍て退下す。辛苦極りなし。…」

（稿者考）

〈2つの日記ともに、囲碁の達者な少年のことを記す。関白・藤原（九条）兼実（当時、関白）に召しだされて技を披露、藤原定家も兼実の第に伺候して対局を見物した。「実に以つて不思議なり」とあり、大人の上手と対局して負かしたのか〉

☆道範（1217年）

『百鍊抄』（公家日記などの記録を抜粋した史書、1300年頃成立）

「（建保5年・1217年）今日、上皇御発心地令落、仍御験者阿闍梨道範賜二御劔御馬御衣等一、任二権少僧都一、先被任二律師一、…」

（稿者考）

〈後鳥羽上皇不予による祈祷の記事で、文中の「阿闍梨道範」は、先にあげた『二中歴』に「嵯峨阿闍梨・道範」とあった〉

☆如仏・俊快・珍覚（1253年）

『古今著聞集』（1254年成立 説話集）

〈巻十二、博奕第十八〉〔法深房と刑部房囲碁の勝負に付き争論の事〕（本文 省略、以下概要）「建長5年（1253年）師走29日に僧侶2人が碁を打って「両劫に仮生一つ」という局面ができて生か死かを争う。当時の僧で囲碁の上手、如仏、俊快、珍覚の3人に石の生死を問いに使者を走らせた。」

（稿者考）

〈この逸話に名の出る人物の経歴などは不詳だが、中に一人法深坊は別の逸話が『古今著聞集』の中にみえる。俗名を藤原孝時（1189年頃～1266年）といい、正五位下蔵人で出家、当時名のある樂人だったようである〉

（参考資料）

『増補俚言集覧』（1797年成立 辞書）（前書の引用とルールの解説、本文 省略）

『三国事蹟除睡鈔』（1721年成立 考証書）（前書の引用、本文 略略）

『爛柯堂棋話』（既出）（前書の引用とルールの解説、本文 省略）

〔室町時代の碁打〕

☆希代神変 小松法師（1377年）

『洞院公定公記』（洞院公定の日記）

「（永和3年・1377年）二月五日、癸丑、天晴る。今日園中将基明朝臣来り、同道し北辺に遊行す。土筆・水芹を取り、聊か之を賞翫す。彼羽林多々須辺に於て張行し一興す。帰宅の次即ち彼の朝臣を招引し、また小一盞を勧め了んぬ。散所小松法師を召し、碁を打たしむ。希代神変の者也。…」

（稿者考）

〈日記の記者・洞院公定は北朝の公家でこの年38歳、『尊卑分脈』の編者。小松法師を「希代神変者」とは囲碁の腕前をいうのであろう。小松法師は外に記録が見当たらず履歴などは不詳〉

☆幕府の碁会に呼ばれた上手たち 宗勝（式部）・昌阿（性阿）・大円

(1) (1431年)

『満済准后日記』（将軍家護持僧 満済准后の日記）

「(永享3年・1431年)六月十二日、晴る。室町殿参り、御対面す。…晩頭に及び寺に入る。関東管領より上杉安房守方への状、上覧に備ふべき由管領申入るの間、今日御目に懸け了んぬ。此状を門跡に預け置くべき由仰せらる間、其儀也。宝池院へ預申す也。雨止みて御祈結願了んぬ。東寺同前。新造御厩七間に於て、囲碁これ在り。洛中の上手を少々召さる。大円北野周防法眼・宗勝（式部）・昌阿・一色・吉原等以上七人と云々。懸物に盆香合、御劔一腰を打勝に為すべきと云々。今日は勝負決せずと云々。…」

(稿者考)

〈足利将軍家護持僧・満済准后の日記。満済は醍醐寺の僧で、3代将軍・義満とその子の4代・義持、6代・義教の信を得て「黒衣の将軍」と評された人物。

記事は6代・義教の治政、洛中の上手を集めて開かれた幕府の碁会の様子。参集した「京の上手七人」のうちの宗勝（式部）と昌阿は、次に引く『看聞御記』の囲碁記録にも名がみえる。また、大円は、後に掲載する連歌師・心敬の『ひとりごと』のなかに、囲碁の上手として同名が載る。

なお、碁の上手とは無縁の蛇足だが、この満済准后の日記には、将軍・足利義教に随従して正倉院の宝物を拝観し、紺・紅の碁石を土産に持ち帰る、といった記録もある〉

(2) (1435年)

『看聞御記』（伏見宮貞成親王の日記）

「(永享7年・1435年)八月廿二日。暁雨降る。天明以後に晴る。日出以前門を出て乗車（一族揃って上洛のこと、中略）予は室町殿直に参ず。…三献了りて盤上の御遊有るべき之由にて、主人（将軍義教）張行す。則ち囲碁打を二人召し出さる。式部〔三寶院侍法師〕・性阿〔遁世物〕が参る。懸物に段子一反、珪璋盆一枚、練貫二重を出さる。式部は上手と云々。性阿先を以て打つ。又主人と関白少将と碁を遊さる。三番を関白が負けられ了んぬ。三条と日野と囲碁を一番打つ。日野が負け了んぬ。按察と源宰相と双六を五番打つ。源宰相勝つ。予は何をか御沙汰の由を源宰相に尋ねらる。囲碁を遊ばるの由を申す。三条と参るべきの由仰せられ。則ち打つ。二番にて持

也。[初番は三条勝ち。次いで予が勝つ。]式部・性阿三番を打つの間、数剋三つ時許りなり。見物退屈す。性阿が三番ながら負けたんぬ。懸物を式部拝領し退出す。眉目なり。囲碁之間一献退転無し。役送無人之由仰せらる。明豊俄に召されて参す。但し遅参す。武家近習輩役送に召さるべき之条、如何之由を申さる。関白申され談ず。内々儀苦しからざる歎之由申さる。猶日野三条御談合同前。猶雖有猶予無人之間三人召し出さる。一色五郎・山名小次郎・畠山七郎、[各若俗也]公卿之役送を勲仕す。[但し関白左大将は勲仕せず]数献之間、予両度御酌に立つ。関白例之当座之会数ヶ度也。太逸と、式部、囲碁を三番了んぬ。[于時酉の下、]其後両三献畢りて主人座を起つ。予も同じく座を起ちて休所に帰す。…」

(稿者考)

〈日記の記者・伏見宮貞成親王は、持明院の嫡流で崇高天皇の孫に当たり、後花園天皇の実父。『看聞御記』は晩年30年間にわたって書きつがれたものが伝わり、碁好きの親王で連日の日記に囲碁の記録がみえる。

記事の永享7年には、將軍足利義教の援助によって洛中に伏見御所が建築された。朝廷・公家と幕府とが融和の関係にあった一時期であった。

親王が上洛し、方違えて足利義教の第に滞在し歓待を受けた。関白以下の公家も参会し、上手を招いた囲碁の興行でもてなされた。親王の囲碁好きに対する將軍のもてなしということであろう。

「主人と関白少将と碁を遊さる」とあり、將軍義教と関白持基が対局した様子。記者の親王は三条と二番打分けている。また、招かれた囲碁上手に前の資料にもみえた式部と性阿の名がある〉

☆一宮大炊(1451年)

『師郷記』(大外記 中原師郷の日記)

「(宝徳3年・1451年)五月十九日、丁巳、今日前右府(三条公冬)に参る[出雲路の第、]内府(三条実量)に坐を令し給ふ。囲碁の上手一宮大炊これに参り[初参也、]囲碁の会あり。希代の上手也。掃部頭(中原師富)も同じく之に参る」

『師郷記』

「(享徳元年・1452年)四月十日、癸酉、今日、予前右府に参る。内府・三位中将殿をして座をせしめ給ふ。碁の上手一宮大炊参り、掃部頭も参る」

『師郷記』

〔享徳元年・1452年〕九月一日、庚申、都督（正親町三条実雅）に参る。次に内府（三条実量）に参る。今夜、庚申を守るため囲碁の会有るべきと云々。仍て逗留せしめられ了んぬ。掃部頭も同じく参る。〕

（稿者考）

〈大外記・中原師郷の日記3条、両2年の公家の碁会の記事。3回ともに、記者・中原師郷が三条公冬邸に伺候したときの様子。先方の主人は息子の実量に座を設営させ、碁会を催している。3回中2回の催しに一宮大炊という囲碁の上手が招かれている。〉

三条実量（1415～1483）は公冬の子で1450年に内大臣、1459年には左大臣となり後三条左大臣といわれる人物〉

☆大円（1468年頃）

『ひとりごと』（1468年成立 歌論随想）

〈一三〉〔諸道の名匠たち〕「およそ、天下に、近き世の無双の人々、愚僧見及び侍りしは、平家物語語りしには、千都検校といへる者、奇特無双の上手といへり。…碁をうち侍りし近き世の無上の上手には、大山の衆徒大円といへる者なり。同じ比、東に三浦民部といへる上手、たがひに勝負なきばかりなり。この二人の人の手合ひ、昔より今に生まれぬばかりの者なり。かれら失せて後も上手とて侍れども、二人に及ぶべきにあらず。…」

（稿者考）

〈連歌師・心敬の歌論随想書。「諸道の名匠」と題する中に、大円と三浦民部という囲碁の上手2人の名をあげている。その一人大円は先の『満濟准后日記』（1431年）に上手として同名があった。もう1人の上手・三浦民部の方は、ほかの書に名をみない。〉

心敬は、晩年戦乱を避けて相模国大山山麓石蔵の古寺に入り、そこで没した。「大山の衆徒大円」とあるところから、大円はこの相模国大山の僧だろうとする連歌研究家の説もある。しかし、一方の対の1人に「東に三浦民部といへる上手」とあるところから、西の伯耆の国の大山（だいせん）とするのが自然だろう。

なお、この心敬には歌論書『さゝめごと』（1463年著）にも、諸芸、囲碁に関する論考があり、また連句付合にも、いくつかの囲碁句がみえる〉

☆宮中碁会の上手 真乗院覚遍・西園寺実遠（1485年）

『お湯殿の上の日記』（禁裏女房の日記）

「（文明17年・1485年）二月廿九日、さいをんし（西園寺実遠） しんせう院（真乗院覚遍）めして、ごうたせられて御らんぜらるゝ、そろそろにて御まいり。」

『実隆公記』（左大臣 三条西実隆の日記）

「（文明17年）二月廿九日、辛巳、陰り、雨時々降る。朝の間梳髪、午後参内す。左府（西園寺実遠）・覚遍僧正（真乗院）等を召され、黒戸に於て囲碁有り。夜に及び尤其の興有り。勝負の躰、絶へて神変の者也。筆端に述べ難し。」

『実隆公記』

「閏三月十七日、戊辰、晴る。…召し有り、□（欠字）直衣を着し参内す。左府（西園寺実遠）・真乗院僧正等を召され、囲碁これ有り。両竹園御参り、聊か一献の事有り。」

（稿者考）

〈いずれも宮中御前で催された碁会の様子。仁和寺の大僧正であった真乗院覚遍が招かれていて、『実隆公記』では「勝負の躰、絶へて神変の者也、筆端に述べ難し」とある。相手をつとめている西園寺実遠は当年52歳で左大臣、こちらも相当の上手だったのであろう。

なお、この時の天皇は後土御門で、『お湯殿の上の日記』には天皇自身が碁を囲んだ記録も多い〉

☆同朋衆 重阿弥 とその相手 如西・西園寺公藤・増位（1489年）

『宣胤卿記』（参議 中御門宣胤の日記）

「（延徳元年・1489年）三月一日、己未、天晴る。安禅寺殿に参り、御盃を賜はる。次いで都護許に向ひ、相伴して飛鳥井大納言入道亭に向ふ。毎年の庭花の賞翫を、今日為すべきの由、姉相公昨日の音信之故也。一桶一種を所持し向ふ也。勤修寺亞相・按察・飛鳥井中納言入道〔号二楽軒、〕・冷泉中納言・同新中納言・民部卿・姉小路園等宰相・通世・基春・雅俊等朝臣・壽官等座に在り。其外武家輩一兩人・宗祇、〔連歌宗匠〕・重阿〔碁上手、〕など也。先日、各々に短冊に花一首を詠ましめられ、今日披講す。読師は予。…」

『実隆公記』（左大臣 三条西実隆の日記）

「（延徳元年・1489年）六月四日、辛卯、天霽る。今日当番也、午の時に参内す。小

資料にみえる 碁の上手たち

御所馬道に於て重阿、〔禅衣を著す、本来時衆也、〕・伊予法橋泰本〔青蓮院坊官、〕
など碁局を囲む。、簾中に於て觀覽有り。親王御方・伏見殿・連輝軒・万松軒・予・
民部卿・園宰相大貳三位・菅原□□（欠字）碁局は妙々玄々、筆端に勒し難し。□□
（欠字）…」

（稿者考）

〈碁の上手・重阿弥の名が日記に見える最初の記録。『宣胤卿記』は、飛鳥井の花見の宴
の様子で、招客の中に「重阿、碁上手」とある。『実隆公記』は、宮中での碁会の様子で、
重阿弥を「禅衣を著し、本来時衆也」と割注をしている。幕府に芸能で抱えられた同朋衆は
僧体で阿弥号を称し、かつ時宗の僧侶が多かったとされる。重阿も重阿弥と記されるものも
多く、この同朋衆の一人だったと想像する。

なお、このお抱え芸能団体「同朋衆」は室町幕府がしいた制度だが、その走りは鎌倉の3
代執権 北条泰時（1232年「御成敗式目」を制定し執権体制を完成させた人物）の時代で、
「幕府の小侍所の結番ごとに芸能に秀でた者を加え、武家も一芸を持つように心掛けるべ
し」といった役所の触れが出されている。

この碁打 重阿弥は当時よく知られた囲碁の上手だったようで当時の日記類ほかのものに
数多く名前をみる。対局相手の碁打の名もみえ、以下それらの記録を列記する〉

『蔭涼軒日録』（相国寺の寮舎蔭涼軒の公用日記）

「〔延徳3年・1491年〕四月廿九日、参らず。天快晴。…景甫往常喜同じく途月江来
る。待つの間、皆厩中に在りて馬を見る。啜茶し打話。時に碁の者重阿弥を招き、栗
田と二番之を囲む。栗田が石三ヶ置き之に勝つ。又石三ヶ置き、又之に勝つ。…」

『後法興院記』（前の関白太政大臣 近衛政家の日記）

「〔明応2年・1493年〕閏四月十八日、壬午、晴る。雅俊朝臣・碁上手重阿弥、並び
に如西など召し具す。来りて前に於て碁を打つ。重阿弥と如西が三盤之を打つ〔重の
二三也〕、又重阿と雅俊朝臣が一盤之を打つ〔重の二四也〕、次いで盃酌の事有り、晚
に及び各帰る。…」

（稿者考）

〈割注の「重の二三也」「重の二四也」はいわゆる手合割であろう〉

『後法興院記』

「〔明応2年・1493年〕五月十五日、戊申、晴て風吹く。鷹司前関白父子来らる。楊
弓・鞠の興有り。勸修寺黄門・雅俊朝臣など来る。重阿・如西など来りて、碁を弾

ず。土岐民部大輔・妙瑞寺来りて、鞠足也。…」

『後法興院記』

「(明応4年・1495年)八月廿一日、辛未、晴陰り、暁に雨下る。雅俊朝臣・重阿など来りて、終日碁を囲む。晩景に鞠の興有り。…」

『言国卿記』(公家 山科言国の日記)

「(文亀元年・1501年)五月六日、癸丑、天曇り、時々雨下る。

一、今日時に弘願院来臨す。予しやうばん畢んぬ。其の時分に彝首座西園寺(公藤)より使に來られる間、中酒を分ち畢んぬ。西園寺へ、どう阿ごをうちに來るべき由の間、予も見物に來るべき由申さる間、則ち用意す。首座を同道し行き畢んぬ。

一、西園寺内府とどう阿と碁をうたれ畢んぬ。近比の見事也。五番うたれ畢んぬ。二つにて西園寺うたるゝ也。其の後一こん之れ在り。しやうばんの衆、予・洞院御僧・不動院・どう阿・彝首さ・師富朝臣(大外記)父子也。さうめん其の(他)種々にて酒これ在り。一こんの後、洞院御僧とどう(重阿)又一番うたれ畢んぬ。手あひ内府と同じ。首勝たれ了んぬ。其の後予・各、歸り了んぬ。…」

(稿者考)

〈西園寺邸の碁会。この年の当主は公藤で47歳で内大臣、先に上手として名をあげた西園寺実遠の子。同朋の上手に「二つ」とは相当な打ち手のようで、父と並んで公家の上手だったようである〉

『元長卿記』(公家 甘露寺元長、46歳の日記)

「(文亀2年・1502年)二月十八日、晴る。聯輝軒(就山永崇)に參る。齋あり。江南院・親就朝臣(和氣)同道し、象戯有り。また碁の上手重阿並びに弟子の小法師[十歳]參る。暁陰に退出し蓬屋に歸る。…」

(稿者考)

〈重阿弥が十歳の弟子の小法師を連れてたとある。子どもの碁打であろう〉

『宣胤卿記』

「(文亀2年・1502年)四月三日、又住彼寺(誓願寺)中、重阿弥碁を打つ。天下第一の上手也。[相手は増位、細川政元朝臣被官、]見物の輩、奇異の思ひ成り。二条殿より筍を賜る。」

(稿者考)

〈記者は中御門宣胤で、先の1489年の日記にも、重阿弥の記事を記している。重阿弥の相

資料にみえる 碁の上手たち

手を「増位、細川政元の被官」とする。当時の有力大名も幕府の同朋衆にならって芸能者を抱えていたようである)

『後法成寺関白日記』(左大臣 近衛尚通の日記)

「(永正3年・1506年)七月廿五日、癸卯、晴る。女中(尚通室維子)清水へ参詣す。晩に及び左衛門督[為広卿](冷泉)・中山中納言[宣親卿]・小原判官・重阿弥の師弟子など来りて、碁をうつ。一盞を勧む。…」

(参考資料)

『大乘院寺社雑事記』(興福寺子院の雑事記)

「(文明17年・1485年)二月十一日、一、色々手取方、…一、同(一乗院北面方并遁分春阿・重阿・智阿ミ。)…」

『同』

「(文明17年・1485年)四月十一日、一、竹千代・寛明・重阿ミ・教浄参宮之由、今日越智参宮、女房衆以下云々、一国之大儀也云々。…」

『同』

「(文明17年・1485年)七月廿七日、一、古市之代官北野山重阿ミ以外腫物大事云々、悪行者也、御罰勿論也。…」

『同』

「(延徳3年・1491年)八月廿二日、一、予上洛、東林院僧正同、清賢法印同、藤賀・重阿ミ召具、順願以下為見物罷上、直指院殿に落付了、」

(稿者考)

〈「興福寺子院の雑事記『大乘院寺社雑事記』の中に、重阿弥の名が散見する。この重阿弥はいわゆる碁打の重阿弥と同一人物かどうか不詳。「悪行者也」と批難をうけていて、この重阿弥が碁打だとするとそれは困碁に対する批難ということになるうか。以下、日記以外の書にみえる重阿弥をまとめてあげる〉

『兼載雑談』(連歌師 猪苗代兼載の談録)

「物の上手にならむ事、大事なり。碁打重阿に、ある人兄弟ながら先にてうてるなり。勝負なし。又、人、重阿に兄弟碁の事を問ふに、「兄まされり」と答ふ。人皆云、「いつれも先にてうつに、兄のまさるといふは如何。」といひしに、重云、「弟は打手さだまりて、はや我流と見えたり。其流と見えば、はやすぐるゝ事あるまじき。」といふなり。面白き詞なり。…」

(稿者考)

〈『兼載雑談』は1510年に没した連歌師・猪苗代兼載の談録で、弟子の編んだもの。「打手さだまりて、我流」は進歩が望めない、と重阿がいった、というのであろう〉

『多胡辰敬家訓』(戦国武将・多胡辰敬の家訓書)

「一、万の事に付てれうけん(料簡)なくては叶まじき也。…くはう(果報)能芸きよう(器用)なりとも此ごとし。碁といふ物は目の前にてかちまけ(勝負)あればひいきへんば(鼻肩偏頗)も入ず。然ば天下一の上手といふは近代極楽寺の重阿弥といふ碁打なり。されば世上に此人よりまして打人なし。上もなきとやをもはれけん。いづくとも知らぬ客僧来て碁を打て帰りしなり。それより重阿弥心うかうかとなりしといへり。小国といへども日本ひろし。一里二里の間、一郡二郡の間に我程の者なしと思事、まことにあかりも知ぬをかしき事也。左様の事をや井の内の蛭と申べき。日月の御めぐりあるよりもたかき天あり。大海の底より下に世界有り。何ともわかち申されざる世の中也。(狂歌 略)」

(稿者考)

〈『多胡辰敬家訓』は尼子家に仕えた戦国武将・多胡辰敬(1562年没)の家訓書。ここでは重阿弥を極楽寺の僧としている。この極楽寺は広島廿日市のそれかと思われるが、重阿弥晩年の居所だったのだろうか〉

☆意雲(重阿弥と同時代)

『半陶文集』(彦龍周興の詩文集)

「[皓隠斎説]意雲老人、泉南の庵に居す、自ら可竹と号す、又皓隠を以て寝に扁す、従容余に謂て曰く、昔巴園の人大橋を収む、之を割るに二叟有り、対碁曰、橋中之楽と、(賛など、後略)」

(稿者考)

〈『半陶文集』は1491年に34歳で没した相国寺僧・彦龍周興の詩文集。文中に見える「意雲」も、重阿弥と同時代の打ち手と思われるが、当時の記録の中には他に名をみない。重阿弥が同朋衆として京師の間に有名だったのに対し、「泉南の隠者」だったためであろう。

以下の書はいずれも近世になって編まれたもので、この『半陶文集』の記事に拠ったと思われる〉

『本朝遼史』(1663年成立 隠士説話書)〈巻下〉[意雲]『半陶文集』の引用、本文 略)

資料にみえる 碁の上手たち

『日本古今人物史』(1668年成立 考証書)「〈巻七〉[意雲](『半陶文集』の引用、本文省略)

『堺鑑』(1684年成立 地史)「〈人物・技芸〉[意雲](『半陶文集』の引用、本文省略)

『和漢三才図会』(1712年成立 事典)(『半陶文集』の引用、本文省略)

『本朝世事談綺』(1734年成立 説話考証)

「〈態芸門〉[碁] 本朝は吉備大臣にはじまる。…中世後土御門院の朝に、意雲老人妙術たり。そのち後陽成院の朝に、寂光寺本因坊日海法印、天下の巧手とす。代々本因坊と称す。頃年の本因坊道策は、古今の妙術たり。碁聖といふべきか。…」

『和泉名所図会』(1766年成立 名所記)(『半陶文集』の引用、本文省略)

『爛柯堂棋話』(既出)(『半陶文集』の引用、本文省略)

☆了本(1544年頃)

『東国紀行』(1544年成立 紀行文)

(旅中の表敬訪問の条)「観音寺登城。去夏御参詣。毎日御気も尽されし名残。其年の御不例。并発蘭軒召下されて。祈療の残る所なくて。此比聊か御快気とて。澄玄さへ下さるべき。折よく罷り下りたるよし。進藤山城守御内儀聞かせられたり。宿老面々にさへ御対面なき頃なれば。御礼も憚り多くて。さたにも及ばざるに。過分の事也。誠に御相伴ととも。左右大夫殿。中務大輔殿。永田備中守。碁打了本。猿楽一両輩。次の間に伺候したる計なり。座敷は二階尤も眺望をいはず。老曾森。麓の松原に続きて。板倉の山田。蒲生野の玉のをやま。さながら磨ける砌なるべし。…」

(稿者考)

〈連歌師 宗牧の東海道下りの紀行文。観音寺城に六角定頼を表敬した記事のようである。参会者の芸人の中に碁打「了本」の名がみえる。招客の接待役だから、相当の打ち手だったのであろう〉

[安土桃山時代の碁打]

(稿者注：以下、戦国末期の記録にみえる資料については、碁打ごとに資料をまとめるのではなく、時代順に資料を列挙する)

☆徳雲（1570年）

『言継卿記』（大納言 山科言継の日記）

「（元龜元年・1570年）十二月一日、甲午、天晴る。武衛家へ参る。御留守に聖護院御門主・大覚寺殿など也。其の外、細川右馬頭・摂津守・木下藤吉郎など祇候す。御酒これ有り。次いで徳雲と藤吉郎の碁これ有り。…」

（稿者考）

〈日記類の囲碁関連の記事に秀吉が初出する記録である。場所の武衛家は斯波氏をいうが、斯波氏は1561年に義銀が信長に反して没落している。義銀の弟・毛利秀頼が信長の臣で、これをいうものか。細川右馬頭は藤賢。秀吉の囲碁の相手をした徳雲とは、接待役として呼ばれていた碁打であろうか。

翌年の『言継卿記』に、細川藤孝の第で囲碁の上手を集めた碁会の記録がある。こちらには碁打の名が記されていないが、参考にあげておく〉

（参考資料）

『言継卿記』

「（元龜2年・1571年）二月卅日、壬戌、天晴る。午の時より中御門・雲松軒などを同道せしめ吉田へ罷り向ふ。路次の土筆これを取る。吉田は父子乍ら、細川兵部大輔に上手衆の囲碁これ有りて、罷り向くと云々。…」

☆算砂・宗心（1571年）

『宗及自会記』（津田宗及の茶会記録）

「（元龜2年・1571年）三月十九日、朝、三好咲岩、池田紀伊守、河原宗久、
一、長板、フトン・しがらき、ニツ置、龜のふた
一、床、定家色紙、かけ、カウライ茶碗
右会過テ、大座敷にて碁有、宗心、京之しんぼち、但、十三に成候、客人五十人斗、碁三番アリ、三ツ之碁、宗心勝也、…」

（稿者考）

〈堺の豪商・天王寺屋の津田宗及の茶会の記録。宗及は千利休・今井宗久とともに「茶湯の三師匠」と称される茶人。50人ほどの茶会で招客の接待に碁会を催し、上手同士の対局が披露されたようである。宗心と京のしんぼち（新発）が3子の碁を3番披露して宗心が勝った、とする。宗心の名はこの後の記録にも散見されるが詳細は不詳。相手の京の新発を「十

三に成候」とするが、後の算砂もこの年13歳の新発であった)

☆仙也(1571年)

『棚守房頭手記』(厳島明神神官 棚守房頭の記録)

「一社頭事立替らるゝ、然者遷宮の儀、往古は当社々家老者中調べ来ると見える。…元就公と申談じ、従前の神道伝授なれば、京都吉田神主兼右をよびくださんと申す。然者未の歳(元龜2年・1571年)六月十四日、元就公御死去なれば、万事相違なれども、兼右をよび下し申す。十二月廿一日下向あり。長楽寺を宿坊に申付る。…今度兼右下向に付て、(同行数人の名、略)碁打専哉同道下向在り。山口の長岡と吉田に於て、はれなる碁在り。専哉に二ツにて三番、長岡まくるなり。さる程に兼右に宝蔵の太刀刀を明神よりの御引出物に参られるべき由、元就公と御意得候間、菊作の太刀はせべの国重の刀を取出し、参らせ候処、隆景の御奉納候き、来大郎作の太刀を所望なるの由にて、兩種を御返し候条、何も不進候、御鬮共給ひ見候処に、おりざる間、宝蔵の太刀刀一種も参せず候。棚守より銘作の太刀二ツ、刀四ツ、丸貫のだんの脇刀一ツ進上申候ひき。上よりは太刀、刀、銀子百枚、其外巻物多くこれあり、今度の御入目、彼是二三万貫も入べく候哉。…」

(稿者考)

〈厳島明神神官・棚守房頭の記録。この年(1571年)の遷宮の神事に京の吉田神社を頼んだ。吉田社の吉田兼右は、この前年に子の兼見に家督を譲っていたが、兼右は以前から大内氏や毛利氏など中国の勢力家との縁があり、自ら遷宮の神事に出向いたようである。

その吉田兼右が同道した中に「碁打専哉」とある、これは仙也のことであろう。「山口の長岡と吉田に於て、はれなる碁在り。専哉に二ツにて三番、長岡まくるなり」とある、吉田神社で碁会を開いたらしい。「専哉に二ツ」の相手・長岡は細川藤孝(幽斎)であろう。吉田社の吉田兼見と細川藤孝は従兄弟の間柄であった。武将の囲碁好きは多くいるが、腕前は幽斎が頭抜けていたのではないか。

吉田兼見には、『兼見卿記』として日記が伝わり多くの碁会の記録も記されているが、この「専哉対長岡の晴れの対局」の記録はみえない)

☆菅沼宗心・算砂・仙也(1573年)

『長帳続年日記』(会津塔寺八幡宮の年次記録)

「天正元年（1573年）癸酉、会津黒川町菅沼宗心と云者、囲碁の能有り、郡中無敵、其頃本因坊と囲て勝つ、仍て信長にも上見ず、歸りて越前にて河に溺死と云。…」

『会津旧事雑考』（1672年成立 地方史 向井吉重編）

「天正元年癸酉、菅沼宗心在り、天性囲碁を能くす。郡に敵手無し。其頃宇都宮真野氏世有囲碁譽、宗心行き対奕す、容易勝下視矣、聞勢州に善くする者有り、又彼に到。譽者国を挙て十九人有り、宗心交して対奕す、一人として亦敵手無し、徒膽沢六郎左衛門一人悟心之行勝、不对奕、故心太夸能、洛に到り本因坊と対奕せんことを望む、終に入洛す、拳洛在囲碁之声者対奕、一人として亦敵手無し、則ち本因坊亦不得止、微服潜行誠対奕、打頭輪者二番、時に森蘭丸事を信長公に告ぐ、召して仙也と対奕せしむ、也は本因坊師と雖も、近来因却類青藍、因其不敵、況んや也においておや、然不幸心之輪者、尋二番、無状退憤悶欲帰郷、越前への路經に河に溺れ死すと云ふ、彼新九郎は始め、小字を益十と云ふ、先本因坊と対奕之囲碁一番、世有記於体者、故取載云。…」

（稿者考）

〈会津の地方史料が伝える郷土の碁打の武者修行を語る逸話。『長帳続年日記』は会津塔寺八幡宮の年次記録で、『会津旧事雑考』は名君の評高い会津藩主 保科正之の命により編まれた地方史料。

会津の菅沼宗心という碁打が対局相手を求めて上洛、ことごとくを破り、本因坊にも2番勝った。このことを森蘭丸が信長に告げて、信長は本因坊の師匠・仙也と対局させた。宗心は敗れて帰郷の途中の川で溺死したという。本因坊算砂はこの年15歳、本因坊を名乗る前だが、郷土の人士を顕彰するために、後人が「本因坊」の名を持ち出したものであろうか。

この年の2年前の資料『宗及自会記』（既出）に、宗心と13歳の新発（算砂であろう）が対局し宗心が勝った記録があった。この二つの記録を結びつけてよいものかどうか〉

☆仙也（1576年）

『言継卿記』（大納言 山科言継の日記）

「（天正4年・1576年）七月二日、癸巳、天晴る。徳大寺より呼ばるるの間、罷り向ふ。然者大将此次必可有勅許之由、左大弁宰相を以て勅約也、然者九条殿被転左府、大将可被辞之由風聞也、…小笠原民部少輔・碁打の仙也など、酒これ有り。…」

資料にみえる 碁の上手たち

(稿者考)

〈文中の徳大寺は内大臣・徳大寺公維、小笠原民部少輔は信長の臣となっていた貞慶と思われる。記者・山科言継が徳大寺公維を訪ね、招客に碁打の仙也もいた、というもの。仙也は先の2つの記録にもみえていたが、日次記録の中に「碁打仙也」として名がみえるのは、これが初出である。仙也はこの後にもしばしば名が出ていて、本因坊の師匠とも、堺に住したとも伝わるが、その伝記ははっきりしないようである〉

☆宗心・樹斎(1578年)

『兼見卿記』(吉田社当主 吉田兼見の日記)

「(天正6年・1578年)十月八日、丙戌、長兵(長岡藤孝)来り、後刻京に皈る。来たる十日、勝竜寺に於て囲碁を興行、下向すべき之由、契諾し同心す。…」

『兼見卿記』

「(天正6年)十月十日、戊子、兼ての約に依り勝竜寺に下向す。長兵門外に出て面会す。道宅同くす。百疋・鮭一を持参す。夜に入り碁を囲む。宗心と樹斎は、宗心の徳番、宗勝つ[十五目、]其の後乱舞深更に及ぶ。一宿す。…」

『兼見卿記』

「(天正6年)十月十一日、己丑、沼入に於て朝食在り、長兵相伴す。新小院に於て囲碁興行す。宗心と樹斎也。最中に佐久間(信盛)南方へ下向の次音信也。…」

(稿者考)

〈日記の記者は吉田社の当主。長岡藤孝(細川幽斎)から碁会興行の案内が来て出かける。碁会は2日つづけて開かれ、碁打の宗心と樹斎との対局があったとする。勝竜寺は長岡当時の幽斎の居城。佐久間信盛は信長の武将で、中国地方の戦線に下向したのであろう。なお記者の吉田兼見と幽斎は従兄弟。〉

碁打ち宗心の名を見るのは3回目だが同一人物かどうか不明、樹斎の名は初出である〉

☆仙也・江州日野の碁打(1580年)

『兼見卿記』(吉田社当主 吉田兼見の日記)

「(天正8年1580年)六月廿八日、丙子、雨降る。徳大寺殿(公維)・南豊軒(相国寺、周超)・仙也来る。内々兼ての約に依りての来臨也。江州日野(蒲生郡)の碁打、[三目の手合也]来る。元右と囲碁これ有り。…」

(稿者考)

〈記者の吉田社で碁会を張行、仙也、日野の上手が参会した〉

☆宰相〈算砂の通称だったか〉・利玄〈初出〉(1581年)

『宗及自会記』(津田宗及 茶会の記録)

「(天正9年・1581年)九月卅日、朝、宮内卿法印 御一人、
床に文琳、四方盆に一ツ、従始、
炉にフトン、釣テ、長板に桶・合子、二ツ置、...
茶過テ、壺、床へ印公御上なされ候、
同昼、大通庵へ、始て法印御出候、風呂ヲタキ候て、大勢よび申候、
京之碁打之宰相とリゲンナド、碁アリ、下田屋宗柳モ被打候、
法印樽代二銀子貳枚并隼人二刀ヲ給候、従 上様(信長)印へ押領之刀也、勢州村
正、後藤めぬきかうがい、...」

(稿者考)

〈先にもあげた堺 天王寺屋の津田宗及の茶会の記録。招客の接待役に碁打を呼び、宰相とリゲンの対局があったとする。リゲンは、後に本因坊の好敵手として頻出する利玄と思われる、その名の初出である。宰相の名も初出。以下にあげる参考資料などから、稿者は「宰相は後の算砂の通称」と考えている。この年、算砂は23才、利玄は17才である〉

(宰相にかかわる参考資料)

『嘉良喜随筆』(江戸寛延期成立 考証随筆)

「遠碧軒随筆。寛文十三年癸丑より延宝二甲寅迄一冊。左に令抜粹。

○碁所は、信長公の時、寂光寺に宰相と云僧あり。碁に器用ありて、御前へ被召出。算沙法印と御よび、是より代々碁の上手をすゆる也。宗桂は桂馬よく使ふにより、信長公名付らる。碁将棋共に、信長公の時より、今の如くに両家になる。信長公生害の夜も、夜半迄碁将棋を御覧あり。暁に成りて、桂川より鮎を持って台所へ来る者の申は、丹波の方より大勢甲冑にて上る。道すがら京へ来る者は切殺すが、大將は明智殿と申す。不審なる事と申す。近習の衆も聞、不審なる事也。夜明なば知れんとて申上げず。此時申上たらば御用意有べきに、運の尽る所也と也。...」

(稿者考)

〈この『嘉良喜随筆』は、江戸寛延期に山口幸充という神道家の編んだ随筆で、逸話は

資料にみえる 碁の上手たち

「遠碧軒随筆」からの抜き書きとある。遠碧軒は江戸前期の儒医・黒川道祐をいい、その随筆は『遠碧軒記』として伝わるが、その中には『嘉良喜随筆』の引く上の逸話の条はみられない)

『雍州府志』(1684年成立 名所記)

「寂光寺、京極大炊御門にあり。空中山と号す。日淵上人、開基にして、日蓮宗二十一箇寺の一員なり。寺産少しばかりあり。織田信長公の時、この寺中、本因坊の僧算沙の弟子宰相、囲碁に精し。召して、その術を見たまふ。その後、東武より、本因坊ならびに将碁の巧手宗桂、共に五十石の年俸を賜ふ。これより後、この坊の住僧、経巻を読むことを知らずといへども、天性囲碁に通ずる者を撰びて、髪を剃りて僧とす。年々東武に赴き、柳営に謁見す。およそ、囲碁・将碁の奕徒、家を立て、禄を受く。これ、本朝の流風なり。…」

(稿者考)

〈この『雍州府志』にいう宰相は『京羽二重織留』(1689年刊)などの名所記にもひかれている〉

『京華要誌』(明治28年刊 名所記、京都惨事会編)

「[寂光寺、二王門通新高倉東]

空中山と号せり。開基は日淵上人にして、法華勝劣派二十一刹の中なり。初め室町近衛にあり。中頃京極二条に移り、終に此地に転せり。往昔寺中に本因坊といふあり。住僧算沙の弟子某[宰相といふ]囲碁に巧なるを以て信長公に召さる。其後幕府より五十石の俸禄を寺僧に給せらる。爾来寺住は囲碁将棋の妙手を撰びて剃髪せしめ、年々登堂して幕府に謁見するを例となせり。…」

☆樹見・樹齋(1582)

『兼見卿記』(吉田社当主 吉田兼見の日記)

「(天正10年・1582年)四月十一日、己亥、春長軒(村井貞勝)に向ふ。将碁さし、暫し相談す。昨日十日より、村雲に於て大かしら舞をまふ、群集云々。晩に及び帰宅、碁打の壽見来る。…」

『兼見卿記』

「(天正10年)四月十二日、庚子、碁打の樹齋来る。壽見と囲碁有り、壽見負る也。…」

『兼見卿記』

「(天正10年)四月十三日、辛丑、樹齋と壽見の碁を二盤みる。壽見負る也。…」

(稿者考)

〈記者の吉田兼見が村井貞勝の第を訪ねて将棋と碁を楽しむ。(村井貞勝は信長の近臣。記者の将棋敵で、日記には2人の将棋の記事が頻出している)招かれた碁打・樹齋と壽見の対局があったとする。樹齋は1578年『兼見卿記』に既出、壽見の名は初出〉

☆広田(1583年、1586年)

『家忠日記』(徳川の家臣 松平家忠の日記)

「(天正11年・1583年)十二月九日、丁巳、持寄の連歌三光院に而候、竹のや金左、碁うちひろ田こし候、…(長尊の発句など略)」

『家忠日記』

「(天正14年・1586年)八月九日、辛未、竹のや金左衛門尉、碁うちひろたこし候、…」

(稿者考)

〈徳川三河衆で、関が原で戦死した松平家忠の日記。「碁うちひろ田」は不詳〉

☆本因坊(1587年)

『当代記』(寛永年間成立、松平忠明編)

「天正十五年(1587年)閏十一月十三日、碁打の本因坊新城へ下る。亭主九八郎信昌(奥平信昌)此夏京都に於て碁の弟子と為すの間此の如し。則ち同心せしめ、駿河へ下さる。家康公囲碁を数寄給ふ間、日夜碁有り。翌春に帰京せしむ。…翌年囲碁の勝負有り、自余の上手に先強く、本因坊を天下一とし給ふ。…」

『創業記考異(三)』(寛永年間成立 松平忠明編 考証書)

「天正十五年閏十一月、碁打の本因坊、駿河へ下る、家康公、囲碁を数寄給間、日夜碁あり、翌年囲碁勝負有り、自余の上手に先強く、本因坊を天下第一にし給。…」

(稿者考)

〈この年、奥平信昌が京で本因坊の碁の弟子となった、それで本因坊は奥平の居城・新城に下り、奥平は本因坊を駿河の家康のもとに伴い碁を披露させた、というように読める。

日次記録の一級資料ではないが、家康の囲碁記事の初出と思われ、あげておく。奥平信昌

資料にみえる 碁の上手たち

は、家康の女亀姫の婿でもあり、ありうる逸話とも思われるが、天正15年とある年代には疑問がある。すなわち、右記事の「天正十五年閏十一月」という暦日には間違いがある。

この前後の閏月は、天正13年（8月）と16年（5月）で、当年には閏月はない。なお、11月が閏月に当たるのは、下って1601年（慶長6）である。奥平が長篠の戦功により新城に築城したのは天正4年で、天正18年に上州宮崎に移っているから、この年に奥平はたしかに新城にいる。一方、家康が駿府城を築いて浜松から移るのは天正17年で、右の年代とは合わない）

☆本因坊 [秀吉の朱印状] (1588年)

『伝信録』（1706年、本因坊道知編 家元伝書）

「元祖本因坊算砂京都久遠院寂光寺為住職、天然依囿碁名人と為す、太閤御所、御前に於て時之上手と勝負を決む、算砂諸人勝越し候に依り初て太閤御所より本因坊へ碁所仰付られ候御朱印の写、

碁打共事、互先余多有之由聞し召さるに付て為可被相二糺勝負一、今度於御前鹿塩利賢樹斎、山内庄林被召出打候之处、本因坊盤数勝之候。然者右之者共向後可為定先之由被仰出候条相守此旨碁之法度申付候、為御褒美毎年米貳拾石宛併拾人之扶持方被成御扶助、但仙也儀者師匠之事候間可為互先也。

閏五月十八日 御朱印

本因坊」

（稿者考）

〈『伝信録』は1706年に5世本因坊道知（当時17歳）の編んだ家元伝書。その冒頭の初代本因坊算砂の伝に、天正16年（1588年）秀吉から請けたとする「朱印状の写」なるものを載せている。この「秀吉が算砂に朱印状を与えた」という記録が見えるのは、『伝信録』が最も古いもので、それ以前やこの当時の文献類の中には記されていない。

ただ、この朱印状のことは、江戸時代を通じて囿碁界では定説として語り継がれたようである。近代になってからの囿碁関係書の類や人名辞典などでも、この朱印状のことを正面切って否定する論考はなく、草創期の伝説として受け入れられてきたようである。

囿碁歴史研究家の香川忠夫氏は、2008年5月の「囿碁史会」で、「算砂の事蹟を歴史的・多面的に検証した論考」を発表された。氏はそこで、この「朱印状」は偽書だと結論づけて、「家伝書による〈創作〉が伝説化されて定説のように受け入れられてきたもの」とされ

た。稿者もこの香川説に賛同する。

なお、『伝信録』に載る碁打衆の「山内」について、関節蔵は「日本囲碁史綱」で「山内、其名を是安といふ事は、算砂自筆帳に依つて明白である、梵舜日記の是弁は無論同人の事と認める」、と考証している。是算の名は『舜卿旧記』で後出する1606年12月4日の条に見える)

☆利玄(1588年)

「利休消息」(茶人 利休の書簡)

「(天正十六年・1588年) 閏五月二十四日、

一、りけん(利玄)も御前一段可然候、碁之事先に成候て、早つゝけて二番りけんかちにて候。碁も唯二番にて候。かしほつけて四番まけられ候、今八郎殿へ御成にて参候間、閣筆(攔筆)候。恐惶謹言、

壬(閏)五 廿四日 り(花押)

(添え書)利休のふみ、囲碁の席には世に比なき奇品、称美するに堪たり。其道を嗜み、その道を業とする人の所蔵すべきもの也。

因碩(花押)」

(稿者考)

〈茶人・千宗易利休の書簡(後半末尾部分の断簡)と伝えられる。(この記録については、昭和43年、日本棋院主催の囲碁史展に出品され、同45年の『日本歴史』に桑田忠親の論考もある)

部分の断簡で宛て先は不明、「閏五月」とあるところから、この年(1588年)の書簡と考証されている。意味もとりにくい直訳すると次のごとくになるうか。

「利玄も秀吉公の御前のおぼえ一段とよく、まず囲碁ということになり、早くつづけて二番勝った。碁は二番でおわったが、「かしほつけて」の意不明、鹿塩と係わりあるか)四番まけられた。今八郎殿(宇喜多秀家)へ(秀吉公が)御成になり、私も御供するので筆を擱きます」

なお、末尾には因碩の添え書きがついていて、因碩はこの書簡を「寂光寺の日海(算砂)にあてたもの」と推定している。

利休はこの年70歳、囲碁にかかわる逸話などは未見で、利休が囲碁を打ったかどうかは不知。なお、茶会に碁打衆が呼ばれる記録は、日次記録にも多出する。また、茶会の座敷飾り

資料にみえる 碁の上手たち

に碁盤が用意される次第は、『君台観左右帳記』ほかの故実書にも書かれている)

☆本因坊・利玄・小林・寿斉(1588年)

『天正記』(毛利輝元の家臣・平佐就言が輝元の上洛に随行した日記)

「(天正16年・1588年)八月四日、乙酉、天晴、辰の刻に関白様より御鷹進ぜられ候。富士巢の鶺鴒也。口羽伯耆守に御請取せ成され候。御使に御太刀一腰、御帷子二、五百疋進ぜられ候也。巳の刻に勤修寺殿へ御出で候。御取肴にて御酒進ぜられ候事。午の刻に聖護院殿御請待。(座配図、略)

未の刻に此所より御鷹御拝領の御礼として、聚楽へ御参成され候。折節関白様碁を遊ばさる半ばに御対面成され候。碁の御相手仙也・法(本)因坊・理玄・少林以下也。御覧有るべきの由上意に付て、一番の間御祇候候也。申の刻に直様又聖門様へ御出で成され候。御鞠これ有り。(鞠の次第など、後略)」

『天正記』

「(天正16年)八月七日、戊子、天陰ル、卯の刻に宗易(千利休)へ御茶の湯に御出で成され候。宗易自分給仕也。(茶会の次第、中略)

此日尾州内大臣殿(織田信雄)、駿河大納言殿(家康)、大和大納言殿(豊臣秀長)、御出で有るべき御内儀に付て、御一献御支度仰せ付けられ候へ共、関白様碁遊ばされ候間、御参候て御覧有るべきの由仰せ出され候に付て、未の刻に聚楽へ御出頭候。碁御覧成され、其以後御座席、台所迄残り無く見せ参らせられ候。駿河大納言殿、大和大納言殿、御案内者也。関白様も姫子御抱き成され、共に御出で候て、御雑談などこれ有り。隆景様、広家様も御同前也。碁の御相手仙也・本因坊・理玄・寿斉・少林也。酉の刻、御宿妙願寺へ御帰り成され候事。(後略)」

(稿者考)

〈『天正記』は別名『輝元公上洛日記』ともいい、毛利輝元の家臣・平佐就言が天正16年輝元の上洛に随行した日記。8月4日・同7日の両日、聚楽第に秀吉を訪ねた折、碁打の本因坊・理玄(利玄)・寿斉(樹斎)少林(松林、庄林)も呼ばれていた。「関白様碁を遊ばさる半ばに御対面成され候。碁の御相手仙也・法(本)因坊・理玄・少林以下也」「碁の御相手仙也・本因坊・理玄・寿斉・少林也」とあるのは、秀吉が碁打たちと対局していた、というのだろうか。

なお、この年7月28日には、秀吉は禁裏に参内し囲碁披露の接待を受けている)

☆宗和（1589年）

『北野社家日記』（北野天満宮宮司官の歴代日記）

「（天正17年・1589年）八月三日、天気吉、晩に少し降る。今日かわや宗和来候に暮二番打ち候。打てかやしに五ツ置き候て打ち候。天下一に二ツの暮也。又観音寺（見海）煩を見舞に参り候。」

（稿者考）

〈「天下一に二ツ」と評される宗和は、後の茶道宗和流の祖とされる金森長近と思われる。武人で茶を利休に学び秀吉、家康に仕えた人物〉

☆松林（庄林）・宰相・利玄・鹿塩（1590年）

『小早川家文書』（小早川家伝存古文書）

「[豊臣秀吉朱印状]

暮打庄林入道、同鹿塩、并樋口石見守帰京候、路次中伝馬三疋、留々賄等可被申付候也、

七月十五日（秀吉朱印）

羽柴筑前侍従とのへ

羽柴新庄侍従とのへ」

『家忠日記』（徳川の臣・松平家忠の日記）

「（天正18年・1590年）三月十三日、乙卯、奥平九八郎所へ越候。京都松林と申す暮うち越し候て、暮を見物し候。」

『家忠日記』

「（天正18年）六月四日、甲戌、夜雨降る。初なすひ天野清兵へ同心よりこし候。奥平九八郎所に上方宰相りけんかし本暮見物にこし候。…」

（稿者考）

〈秀吉が小早川隆影にあてた朱印状（手紙）1葉（この手紙に年度は記されていないが、天正18年と考証されている）と、2つの日記。いずれも小田原包圍戦の参陣中の消息で、陣中慰問におもむいたのであろう、暮打の名がみえる。〉

「秀吉朱印状」に見える暮打は「庄林入道、同鹿塩」。『家忠日記』は奥平九八郎（信昌）陣屋の暮で、暮打ちは「京都松林」と「上方宰相りけんかし本」とある。「松林」に「宰相」と「利玄」、「かし本」はあるいは「鹿塩」だろうか。

資料にみえる 碁の上手たち

「松林」は外に「庄林」「少林」(1588年『天正記』)「しやう林」(1591年の『言経卿記』)などともみえるが同一人物であろう。宰相は前に検討した算砂のことと思われる。この年算砂はすでに32才の壮年だが、未だ宰相と通称されていたものか)

☆禰宜の上手(1590年)

『多聞院日記』(興福寺多聞院の日次記録)

「(天正18年・1590年)五月十一日、神人孫左衛門死了んぬ。六十六才と。近年大納言殿の御意に叶ふ。御神供以下職満ち足りて了んぬ。みちればかくる習也。困碁の上手、うたい芸能すぐれて一段禰宜には惜き仁也。橋本の左馬と云禰宜も、先段若き者也。不思議の病煩て死了んぬ。是は神道を究たる仁と也。是又神人には惜き事也と云々。芸能才覚も福有も入らざる事也。生者必滅、勿論々々。…」

(稿者考)

〈興福寺多聞院の記録で、66歳で死んだ禰宜を追悼する記事。生前は困碁の上手で大納言すなわち家康にも寵されていたとする〉

☆仙也・仙六・かしを・しやう林・せい庵(1591年)

『言経卿記』(公家 山科言経の日記)

「(天正19年・1591年)十月廿七日、己未、晴陰、晚小雨。…夕喰過テ梅庵(大村由己)へ罷り向く。薄暮に成了んぬ。来る客衆、宇喜多安津(忠家)・仙也・同仙六・かしを・しやう林・せい庵等、碁・将碁これ有り。見物し了んぬ。次いで小喰これ有り。夜半過に帰宅し了んぬ。其後聯句十句これ有り。」

(稿者考)

〈秀吉伽衆・大村由己の碁会。参会者の中に「仙也・同仙六・かしを・しやう林・せい庵」とあるのは碁・将碁の上手たちであろう。仙也は多出するが、仙六は仙也の縁者が弟子のごとくに読める。この後「仙用」「仙角」という碁打ちの名がみえるが同一人物で「仙用(せんろく)」が正しいと考える。(このこと後述)

「かしを」は鹿塩であろうか。なお、1607年『当代記』には、「鹿塩仙用[是仙也子、当春筑紫に於て喧嘩して死す]とあり、この「鹿塩仙用」は一人なのか二人の名なのかに説が分かれるようである。

なお、記者の山科言経は言継の子。1577年権中納言に昇るが1585年に勅勘をこうむり、

1598年に家康の口利きで勅勘をとかれた。天正年間から慶長12年まで多くの囲碁の記録をみる。言経は多趣味の人物で医の心得もあり、謡本の校注を通じて本因坊算砂との交渉もある。勅勘を受けていた期間に秀吉・家康・秀次の知遇を得ている。故実知識の伝授役だった様子で、1591年、家康から五人扶持を受け、さらに1599年からは200石を得ている)

☆本音坊・利玄坊・寿斎・宗具・仙角・山之内入道・イン斎・生林・仙也・仙長・四郎四・宗具(1594年)

『言経卿記』(山科言経の日記)

「(文禄3年・1594年)五月十日、江戸亞相(家康)へ罷り向く。碁を見物し了んぬ。夕喰を相伴し了んぬ。…」

『言経卿記』

「(文禄3年)五月十一日、江戸亞相、了頓[三条□田町、]へ御出之間、参るべき由兼日相催之間罷り向了んぬ。朝・夕喰種々丁寧也。戌刻に帰宅し了んぬ。人数、亞相・予・藤方勘右衛門尉・古田織部・本胤坊[碁打、]其外七八人これ有り。晩に及て景諷これ有り。終日碁・将碁也。…」

『言経卿記』

「(文禄3年)五月十五日、癸巳、殿下(秀次)へ参り、朝喰の相伴、一昨日より殿中に於て碁の上手達を集め打たさる。本音坊・利玄坊・寿斎・宗具・仙角・山之内入道・イン斎・生林・仙也・仙長・四郎四など也。…」

『言経卿記』

「(文禄3年)六月廿六日、癸酉、天晴る。

一、江戸亞相御振舞、建仁寺内常光院にて有之、内々来るべき由有之間、早朝より乗物にて罷向ひ了んぬ、人数は亞相・柳原・勤修寺亞相・予・吉田三位(兼見)・同弟シンレウ院・相国寺葬首座(藤原惺窩)・浅野弾正忠、磯部古田綾部・フナコシ、此三人は太閤衆なり、其外碁打衆、本因坊・利玄坊・仙也・仙長・将碁指宗桂など也。其外碁打・将碁サシ大勢有之、以上相伴衆三十六人有之、…」

『言経卿記』

「(文禄3年)十月廿四日、戊辰、天晴る。江戸亞相へ予・冷・阿茶丸(記者の子)等、罷り向ふ之處に、細川幽齋へ御出也と云々。直に幽齋へ罷り向ひ了んぬ。碁これ有り。見物し了んぬ。夕喰これ有り。相伴の衆、亞相・予・冷泉・阿茶丸・幽齋・紹

資料にみえる 碁の上手たち

巴・本因坊・利玄坊・宗具、其外これ有り。暮々に亞相御帰之間、供をせしめ罷り向き了んぬ。碁を見物し了んぬ。暮過て歸り了んぬ。…」

(稿者考)

〈山科言経の日記5件。5月11日には家康が茶人広野了頓宅へ臨み、記者・山科言経も招かれた。参会者に本胤坊とある。本因坊の名はこれまでの記録はいずれも伝記類で、日次記録の中に本因坊として名のみえるのはこれが初出である。この年、算砂は既に36才になっている。

5月15日は、豊臣秀次の殿中で、碁打衆を集めて三日つづきの碁会があったとする。碁打衆として「本音坊・利玄坊・寿斎・宗具・仙角・山之内入道・イン斎・生林・仙也・仙長・四郎四」と11人の名を列記する。「仙角」は先述したように「仙用(せんろく)」が正しいと考える。この『言経卿記』には1597年に「仙六」、1603年に「仙用」の字でみえる。(「用」は「角」の誤〈なまり〉字とされ「ロク」と訓む。後の『お湯殿の上の日記』には「せんろく」と仮名書きする。商山の四皓の1人に用里〈ろくり〉があり、これに因んだ名付けであろう)

10月24日は細川幽斎の第。これら日記にみえる碁打の名には、初出のものもある。宗具もその1人、後の大坂冬の陣で、家康に堺の世情を注進する棋士を柏尾宗具とするが、同一人物だろうか)

☆本因坊・利玄(1595年)

『言経卿記』(山科言経の日記)

「(文禄4年・1595年)三月廿六日、己亥、雨、…殿下より依仰謡の本注可仕の由有之間、相国寺鹿苑院保長老にて各来集、予南禅寺三長老・相国寺兌長老・泉長老・東福寺哲長老・澄西堂・建仁寺雄長老・稽西堂等也、又殿下御内鳥養道晰・謡衆四人等也、座敷替て知恩寺長老・日蓮薰久遠院・本音坊・要法寺・世雄坊等也、少々紹巴へ申遣了、種々穿鑿也、早朝より罷向了、予飯後罷向了、夕喰有之、謡有之、十番目取了、高砂一番相濟清書也、中書出来了、保長老、殿下持参可有之由被申了、天竜寺彰西堂は依所劣不出了。今日沙汰の本、高砂・うのは(鶴羽)・忠のり・西行桜・楊貴妃・うき舟・関寺小町・江口・さねもり(実盛)・源氏供養、以上十一番也。…」

『言経卿記』

「(文禄4年)四月一日、甲辰、天晴る。江戸亞相へ暮々に罷り向き対顔し了んぬ。

今日謡之本注之事雑談し了んぬ。本音（因）坊・利玄坊と暮これ有り。大勢見物し了んぬ。伊達と暫し雑談せしめ了んぬ。…」

（稿者考）

〈3月26日の日記は、謡本の校註の記事。豊臣秀次は謡本の注釈書「謡抄」の編纂しており、記者の山科言経も校注者の一人に任ぜられていた。その校注者のメンバーには、五山の長老たちや連歌師紹巴などとともに本因坊も加えられていた。

なお、秀次はこの年7月に秀吉から謀反の嫌疑をかけられ聚楽第を追放されて高野山に自害する。「謡抄」は死後の1601年に刊行された。本因坊の余技としては、椿花の栽培がある。

（1630年編『百椿集』に載る）

4月1日は家康を訪ねた記事。本因坊と利玄の暮を見物し、政宗と雑談。この日も「今日謡之本注之事、云々」とみえる〉

☆利玄 [利玄は本能寺の僧] (1596年)

『舜旧記』（神龍院住職 梵舜〈吉田家当主 兼見の弟〉の日記）

「（慶長元年・1596年）一月十日、御齋衆守禅庵 [柿一把・大栗廿、] 持参也、妙心院面甫・祖貞、各依相違此衆迄也、次本能寺衆利玄 [昆布一束、] 全隆坊 [串柿一把、] 持参也、予及面羹御酒之を勧む也、次いで新造に於て兩人衆へ晩の振舞之れ在り、…」

『舜旧記』

「（慶長元年）一月廿日、雨降る。本因坊 [二十疋、扇二本] 来る也。…」

『舜旧記』

「（慶長元年）一月廿四日、雪降る。大蔵少輔へ見舞を為す。錫双・食籠、持参せしむ也。本因坊 [貳十疋、筆三対、] 遣はず也。…」

（稿者考）

〈『舜旧記』の記者・梵舜は吉田家当主・兼見の弟、吉田社の氏寺 神龍院の住職で当年44才。神道家として家康の信を得、その死去に際しては久能山で神式葬祭をとりしきった人物。この年をはじめとして、日記には囲碁と将棋の記事が多くみえる。

3記事ともに年礼の贈答記録で、囲碁上手の利玄と本因坊が顔をみせており、「本能寺衆利玄」と、利玄を本能寺の僧と記す〉

☆本因坊・せんや（1596年）

『玄与日記』（島津藩士 黒斎玄与の上洛日記）

「（慶長元年・1596年）十一月十八日、十七日近衛殿へ伺候す。十八日吉田へかへり侍りぬ。其日幽齋老碁の会を興行す。京中の碁打皆々参られ候。本因坊など也。せんやも参られ候。...」

（稿者考）

〈島津藩士・黒斎の上洛日記。細川幽齋の碁会に、本因坊・仙也など「京中の碁打皆々参られ候」とある。この年9月の『舜旧記』にも、吉田社の碁会に「京中の碁打衆」を招いての興行を記している〉

☆利玄（1597年）

『舜旧記』（神龍院 梵舜の日記）

「（慶長2年・1597年）正月十四日、伏見へ内府家康へ礼也、[扇廿本、]月齋[江式十疋・帯壹筋、]善阿弥陀仏[二十疋、]遣る也、...次いで大東院に於て夜十種香興行也、本能寺之内僧利玄房扇子[二本、]胡齋[五両、]住光坊[扇三本、]持参也、対面に及び振舞申付け了んぬ、...」

『舜旧記』

「（慶長2年）四月九日、天晴る。祇園梅坊に於て碁を興行す。利玄坊、同道せしむ也。終日之遊び也。」

（稿者考）

〈前年につづき「本能寺之内僧利玄房」が、吉田社に年礼に訪れている〉

☆本音坊・利玄・仙也・仙用（1597年）

『言経卿記』（山科言経の日記）

「（慶長3年・1597年）五月七日、丁酉、晴陰。吉田二位（吉田兼見）へ内府御出之間罷り向き了んぬ。乗物令小者・西御方下部等これを雇ふ。先づ神龍院（梵舜）へ罷り向き休息し了んぬ。次いで衣裳を改め了んぬ。吉田二位へ罷り向く之処に、碁・中・少将碁等これ有り。終日之儀也。内府・予・外記・極藤・碁打本音坊（本因坊）・利玄坊、幽齋細川、其外将碁指宗桂、其外二十四五人これ有り。八つ時分まで種々之事これ有り。丁寧之儀也。八つ時分に神龍院へ極藤を同道し罷り向き宿し了んぬ。」

ぬ。雇衆はやがて返し了んぬ。…」

『言経卿記』

「(慶長2年)九月十二日、庚子、雨。江戸内府南禅寺三長老(靈三)へ早朝に御出也。予又乗物にて罷り向き了んぬ。…朝喰栗粉・ウトン、夕喰種々丁寧也。相伴の衆二十四五人これ有り。予・吉田二位(兼見)・水無瀬右兵衛尉入道(親具)・極藤・幽斎(細川藤孝)・其外碁打衆の本音(因)坊・利玄坊・仙也・仙角、其外大勢也。将碁指宗桂(大橋)等也。薄暮に帰宅し了んぬ。…」

(稿者考)

〈吉田社と南禅寺の碁会。いずれも家康や公家を招き、碁・将棋衆を接待に呼んでもてなしている。仙角は前述のように「仙用(せんろく)」と考える〉

☆本印坊・利元・宗具(1597年)

『鹿苑日録』(相国寺鹿苑院主の日記)

「(慶長2年・1597年)九月廿四日、早朝太閤発象馭於大谷刑部少輔華第。刑少は久しく所勞也。悪疾の為を以て、五六年出でず。養子の大覚介、出で迎ふ。先づ数奇屋に於て御茶。御相伴は江戸内府・富田左近・有楽也。御茶の已後広間に到る。広間に於て、御太刀・御馬の金鞍皆具・御腰物・火段子御小袖二十・銀子百枚・綿子百把を進物す。…秀頼様、政所様、北政所様、逐一御服など進物有り。刑少は一分の領知六万石か。過分の進上也。午の刻御膳。内府・拙也。其の外七八人御相伴也。本印坊と利元碁を囲む。本印の先、利玄が九目輪す。太閤と宗具の碁、晩に及ぶ。又御小漬、昏黄に還御す。御普請場より名護屋丸に到り、夜に入り寺に帰る。…」

(編者考)

〈秀吉が大谷刑部を見舞い、大谷家は碁会を用意して接待した。秀吉と対局した宗具は、先の1594年細川幽斎の碁会にも名があった。泉州の碁打・柏尾宗具であろうか〉

☆本音坊・利玄・小性竹・利玄の師匠(1598年)

『言経卿記』

「(慶長3年・1598年)七月廿九日、壬子、天晴る。早朝に伏見へ冷を同道し発足し了んぬ。かご也。旅宿にて衣裳を改め、内府へ罷り向き了んぬ。朝喰これ有り。次いで対顔し了んぬ。牛玉清心円三十粒給り了んぬ。内々約束也。次いで碁これ有りて、

資料にみえる 碁の上手たち

見物也。本音坊・利玄坊等也。見物衆あまたこれ有り。八つ時分に退下し了んぬ。
…」

『言経卿記』

「(慶長3年)十一月廿五日、丁未、天晴る。伏見へ発足す。全阿弥へ罷り向き了んぬ。昆布二束遣はし了んぬ。休息し了んぬ。次いで衣裳を改め、安部伊予守へたら五もたせ罷り向き了んぬ。預け置き了んぬ。次いで内府へ罷り向き対顔し了んぬ。夕浪を相伴し了んぬ。十余人斗りこれ有り。黄昏に及びて益田右衛門尉(増田長盛)へ内府御出の間、同道すべき之由これ有る間、罷り向き了んぬ。済々の振舞也。二十人斗り相伴し了んぬ。本因坊、利玄と碁これ有り。次いで利玄と小性竹[下京集、十四五才也、]これ有り。四つ時亥の下刻に帰られ了んぬ。予全阿に宿し了んぬ。…」

(稿者考)

〈山科言経の日記2件。家康と増田長盛を訪い、本因坊と利玄の対局を観賞する。小性竹という少年の碁打が初出する〉

『舜旧記』

「(慶長3年)十月十八日、雨降る。雷響く。当院に於て碁を興行せしむ。利玄坊来る、同蠟燭[十疋、]を持参す。利玄師匠[栢一包・堺塩、]梅坊[昆布一束、]法哲[油二挺、]同道五六人来る。暮に及びて帰る也。…」

(稿者考)

〈神龍院の碁会に利玄と利玄師匠がくる。その師匠の手土産に「堺塩」あり、居所を暗示する。利玄師匠の名前が記されていないのが口惜しい〉

☆本因坊・利玄(1599年)

『舜旧記』

「(慶長4年・1599年)二月十一日、天晴る。栖松院・松楽庵、兩人朝食に来る。次いで楽人備前来る。予色紙[三十六枚]持参す。次いで幽齋より[杉原十帖・三十疋、]年頭為礼来。次いで本因坊より[扇二本、]来る。…」

(稿者考)

〈本因坊が吉田社に年礼する記録〉

『北野社家日記』(北野八幡宮宮司記録)

「(慶長4年)三月廿日、天気快晴。今日当坊へ利玄来られ、碁これ有り。碁を利玄

持参す。其外本能寺衆四五人來らる。当坊碁を三ツに手を直され候也。…」

『北野社家日記』

「(慶長4年)閏三月十七日、天気快晴、晩少雨降る。今日利玄坊にて碁会これ有り、本因坊も御出也。見物に参る。…」

『北野社家日記』

「(慶長4年)七月廿九日、今夜大雨、今日も降る。内府様(徳川家康)へ御礼に[内衆、初尾五十疋]参る。百疋・かき一折持参す。…内府様に碁これ有り、見物仕る。本任坊・利玄坊兩人。…」

(稿者考)

〈北野社の碁会。この記録でも利玄と本能寺とのかかわりをみる。「当坊碁を三ツに手を直され候」とある。当坊は北野社の宮司だろうか〉

☆本因坊・弥蔵・新作(1600年)

『北野社家日記』(北野八幡宮宮司記録)

「(慶長5年・1600年)二月十三日、天気快晴。本因坊へ礼に参る。百疋持参す。大酒これ有り。…」

『北野社家日記』

「(慶長5年)二月十四日、天気快晴。今日本因坊・弥蔵残らず碁打御出也。振舞申す。本因より碁はん(盤・)こけ(碁筭)二を給ふ。…」

(稿者考)

〈北野社と本因坊との音信。北野社から本因坊へ礼に赴き、翌日には本因坊以下の碁打が碁盤・碁筭を土産に北野社に返礼に来る。「弥蔵」は坊門の棋士と思われるが不詳。(本因坊の年礼や贈答は『本因坊算砂大福帳』として伝存する書(東大史料編纂所蔵)にも載る)〉

『北野社家日記』

「(慶長5年)三月四日、曇。丸(円)山にて新作と申す碁打上手広めこれ有り。我等も参る。頓して帰る。…」

(稿者考)

〈円山で囲碁上手の手広めがあったとする。いわゆる披露の宴だろうか、上手の新作は外にはみえない〉

『北野社家日記』

資料にみえる 碁の上手たち

〔慶長5年〕三月廿八日、天気吉。内府様（徳川家康）へ礼に罷り出ず。一束・一本進上す。養命坊・実相寺同心申す。内府様御前にて碁を見物仕る。こ竹と利玄坊と碁二番これ有り、二番ながら利玄坊勝ち也。…〕

（稿者考）

〈家康第で、こ竹と利玄坊の囲碁2番。こ竹は、1598年『言経卿記』に小性竹の名があったが不詳〉

『北野社家日記』

〔慶長5年〕七月四日、天気快晴。目代夜前之竹門よりの御返の事申し来り候由申す。ききやう（桔梗）・薄花共持来。則ち当坊前へよび出し酒を給ふ。法華堂かり屋の円（縁）に座す。目代と三智と碁うたせ見物す。目代白はかま・衣にて来る。衣はゆるし候間ぬぎ候へと申付く。忝なき由申し碁うつ。目代まけ申す。…、今夜三智と碁うつ。七ツにて十三番ながら当坊勝つ。帷子かけ也。二つの状取りて一笑し候。…〕

（稿者考）

〈三智は碁打衆だろうか、不詳。後の安井家の算知はまだ出生していない〉

『時慶記』（参議 西洞院時慶の日記）

〔慶長5年〕十一月一日、天晴、…此亭には御福来入、田楽あり、内儀（記者室）には北政所（秀吉室）へ女御礼に被参、二郎兵衛来、弥介は朝の間に来て帰る、葛岡佐介殿後室より百々越前（綱家）守の病人被引合、御番は時直（記者息）勤、与吉雇、供に召具、吉蔵は午刻の間暇乞、与所へ出、奥平（信昌）にて本隠坊も馳走候、…〕

『北野社家日記』

〔慶長5年〕十一月十四日、天気快晴。今日浅井勝兵へ所へ連哥に参る。晩には本因坊へ奥平作州（信昌）御出にて相伴に参る。…〕

（稿者考）

〈奥平信昌と本因坊の記事が2件。先の1587年に、奥平が本因坊を伴って駿府の家康を訪う記事をあげた。奥平は、本因坊の碁の弟子だったという説もあり、この年は京都所司代の職にある〉

☆利玄（1601年）

『北野社家日記』

「（慶長6年・1601年）四月廿七日、今朝本多佐渡殿（正信）へ参り候。一段御懇に候。宮仕悉く仰付られ候へと御取成これ在べき由仰られ候。各大名衆御聞候。利玄へ此由申聞、さらし一たん遣され候也。…」

『北野社家日記』

「（慶長6年）五月十三日、天気快晴。今日宗宜振舞にて終日遊ぶ。各京衆重喜・かしわやなど参られ、暮これ有り。…」

（稿者考）

〈北野社の囲碁消息。訪問先の本多正信の邸に利玄も来ていた〉

☆本因坊・利玄、仙舟・道石（1603年）

『お湯殿上の日記』（禁裏女房日記）

「（慶長8年・1603年）四月十九日、はるゝ、ゆふより御申にて、ごうちほんにんぼう・りげん・せん六・たうせきまいる、くる戸にて御らんぜらるゝ、十てうまき物くださる、ほんにんぼう、こばん・ごいししん上申、八てう殿・しやうこゐん殿・たけのうち殿なる、くげしうも、しこう、く御あり、…」

『慶長日件録』（式部少輔 舟橋秀賢の日記）

「（慶長8年）四月十九日、禁中に於て当代上手の碁これ有り。右府（家康）より觀覽に備へらるべきの由、内々に奏聞有りと云々。内々衆十人計り、召しにより伺候す。予も同じく伺候し畢んぬ。碁打四人、本因坊・利玄・仙舟・道石等也。先づ御黒戸の前に打板をかまへ、其上に畳一帖を敷き座とす。見物の公家衆は、其邊に円座を敷く。巳の刻計りに始む。先づ本因坊・利玄これを打つ、持碁也。次いで仙舟・道石これを打つ、道石三目勝つ。次いで本因坊・利玄これを打つ、利玄三目これを勝つ。次いで道石・仙舟これを打つ、仙舟負く。夜に入り終り、亥の刻に各退出す。碁打四人に一束巻物各これを下さる也。…」

『言経卿記』（山科言経の日記）

「（慶長8年）四月十九日、乙巳、天晴る。禁中黒戸へ本音坊・利玄坊・仙舟・道石等召し了んぬ。碁を御覽也。直綴にて参り了んぬ。仙・道は衣也と云々。四番これ有りと云々。十帖に巻物を四人に下さる也云々。内々の衆少々参らる也と云々。伝聞

資料にみえる 碁の上手たち

也。…」

(稿者考)

〈上3件の日次記は、いずれも4月19日の碁打衆の禁裏参内の記録。家康の斡旋で、後陽成天皇は碁打衆を召して囲碁を上覧した。本因坊対利玄、仙角対道石(中村道碩)の対局がそれぞれ二局づつ、計4局が打たれた。本因坊は碁盤と碁石を献上し、禁裏から巻物が下賜された。

後陽成天皇はこの年33歳、秀吉時代に即位、聚楽第に行幸するなど武家の朝廷干渉に忍従してきた。この碁打衆の上覧も家康の奏聞によるもの、とある。家康は、この年3月に征夷大將軍と右大臣の宣下を受けて、その礼に宮中に参内している。碁打衆の参内を奏聞したのもその折だったのかも知れない。この日の行事も家康の顔を立てたものともとれるが、ただ天皇は、公家日記の中に多くの囲碁の記事を残す碁好きで、この一日はプロの対局を楽しんだと思われる。

『お湯殿上の日記』に記すごとく、本因坊は「ほんにんぼう」と訓じたと思われる。また仙角は「せん六」と記されている。後の1607年の『当代記』に「仙、是仙也角、当春筑紫に於て喧嘩して死す」とみえている。これまでに、仙角と記されていた碁打もこの仙のことと解る。後の家元 安井家の4世・5世の当主が名乗る「仙角」はこの「仙」を意識し角ものだろうか、「」を正字の角」と改めたとして、ヨミも「ロク」から「カク」に変えたのだろうか。

なお、将棋指しと禁裏との交渉は、この前年・慶長7年碁に山科言経の仲介で、大橋宗桂が作り物を禁裏に進上している〉

